

342  
53I

創立三十年記念  
伊丹中學校史



\*0050900000\*

0050900-000

特234-69

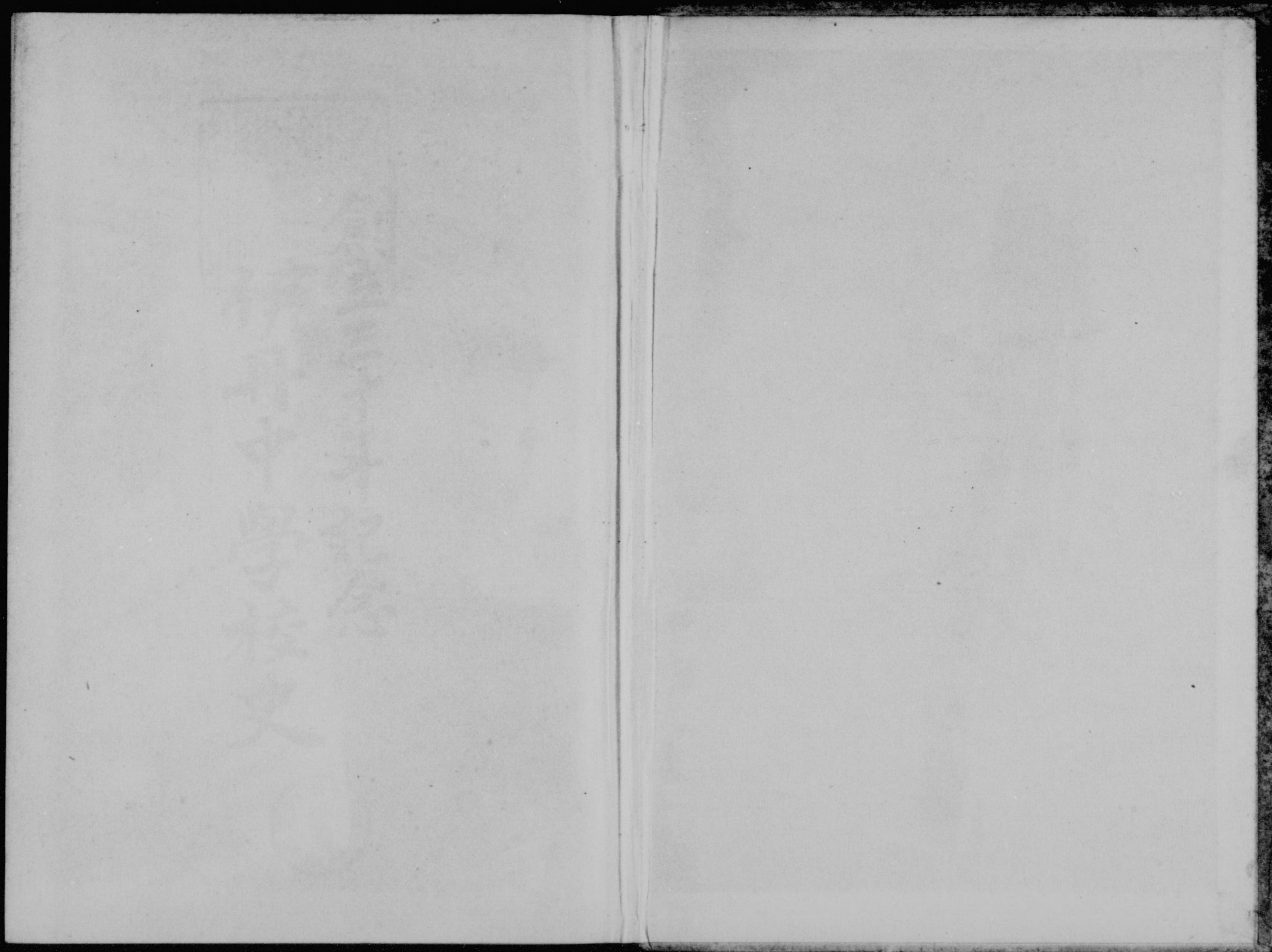
伊丹中学校史

三十周年記念伊丹中学校史編纂委員・編

三十周年記念伊丹中学校史編纂委員

昭和7

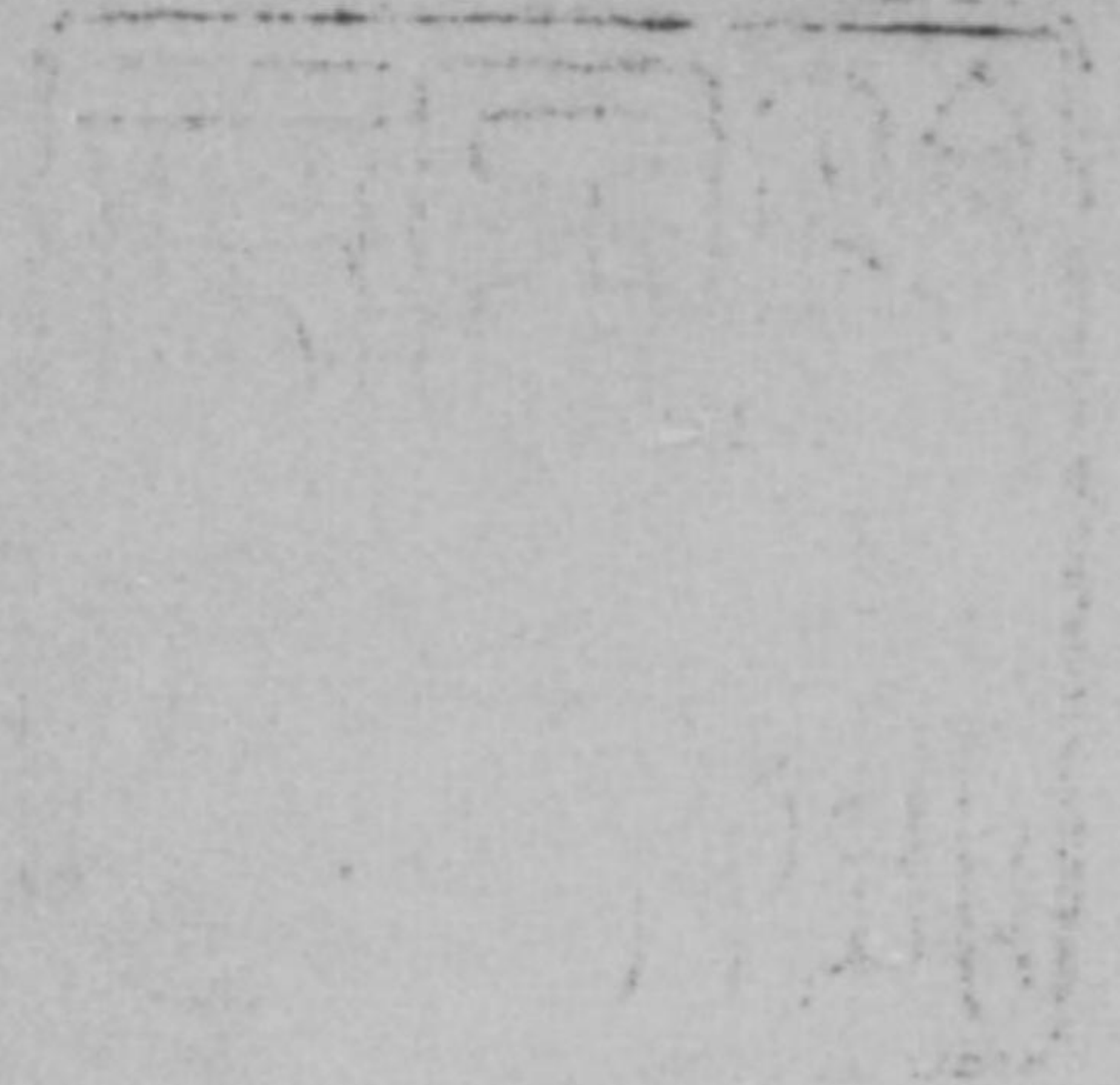
AHM



特234  
69

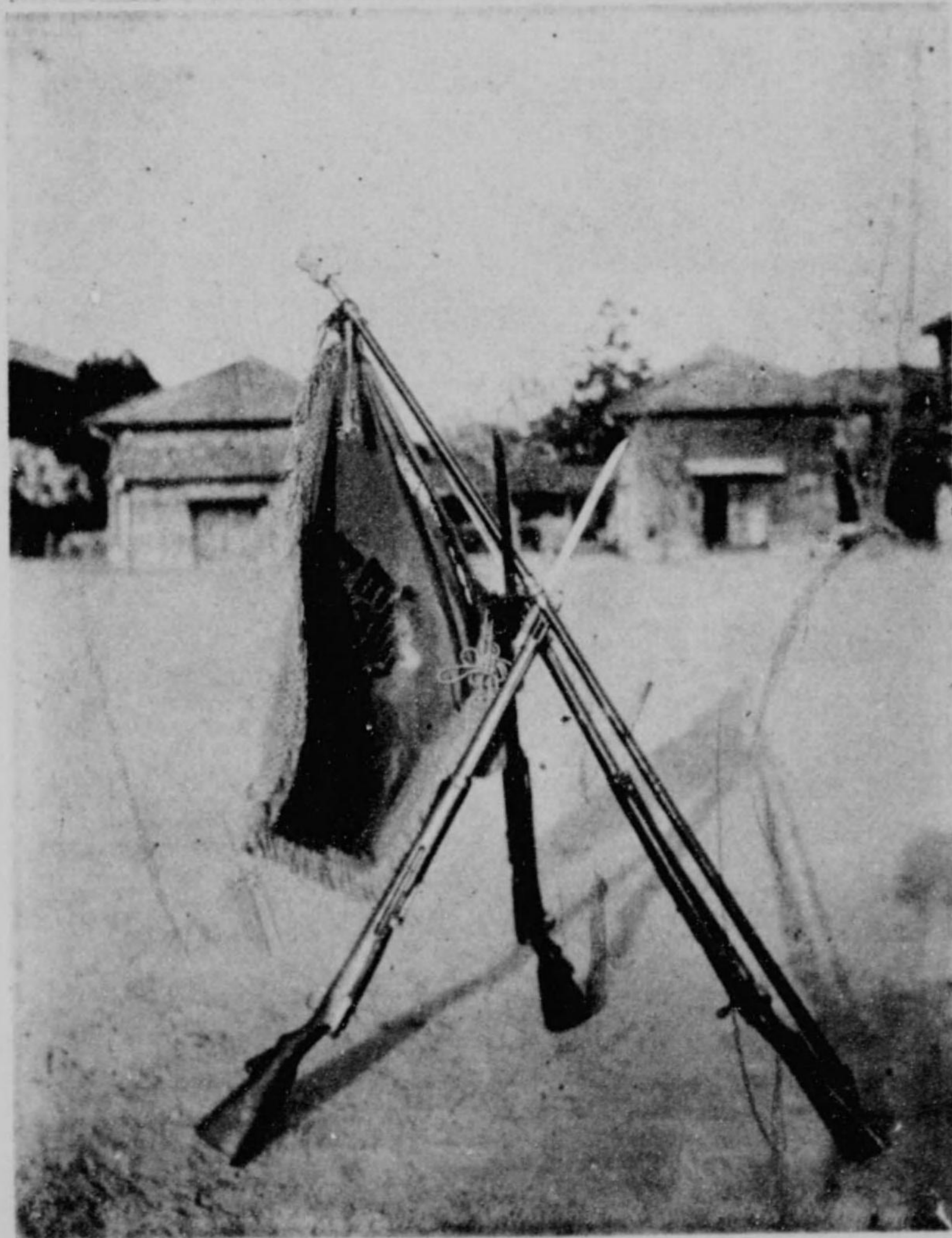


創立三十年紀念  
伊丹中學校史

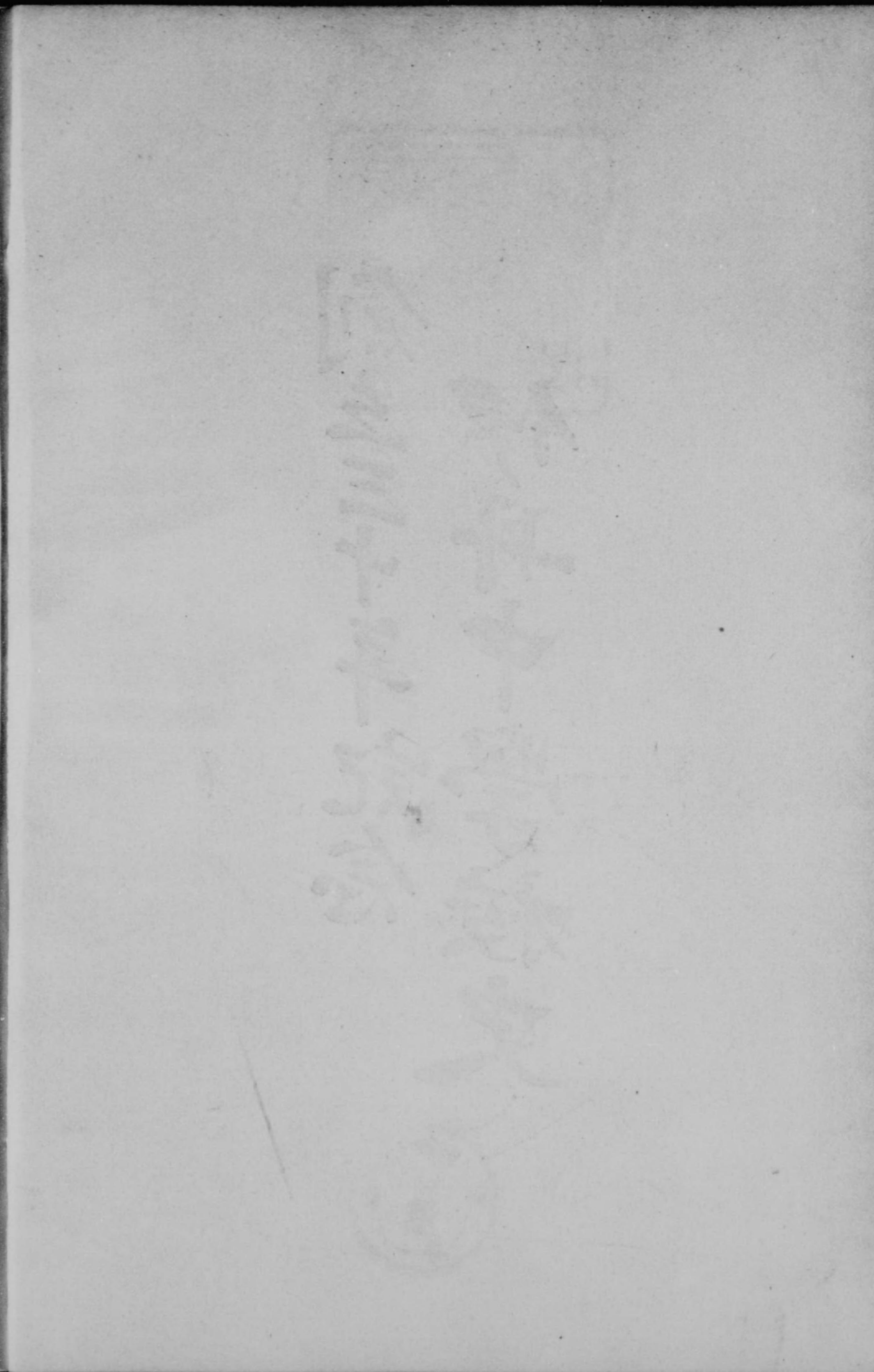


校訓  
誠 勤 剛  
實 勉 健

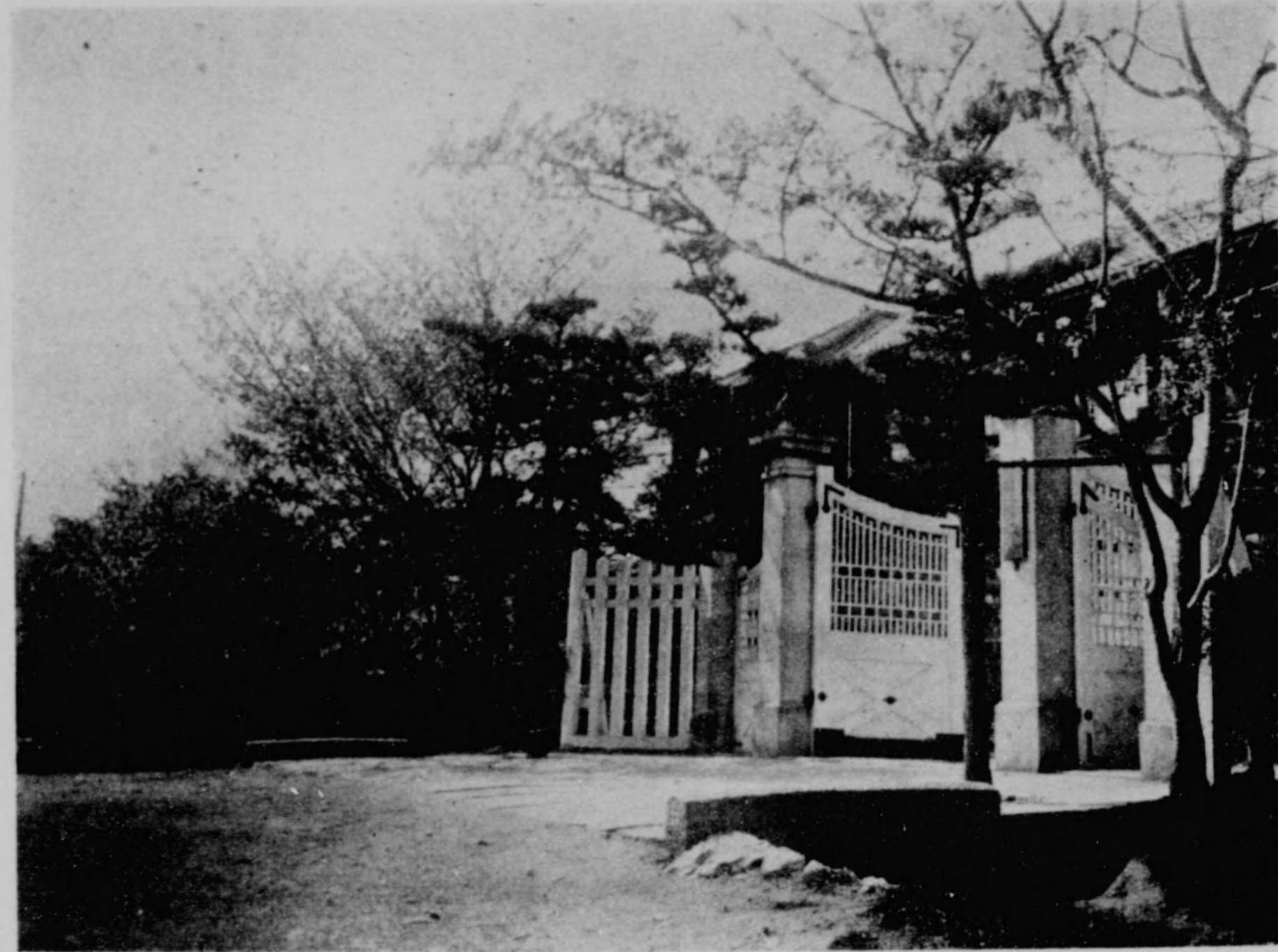
中林田



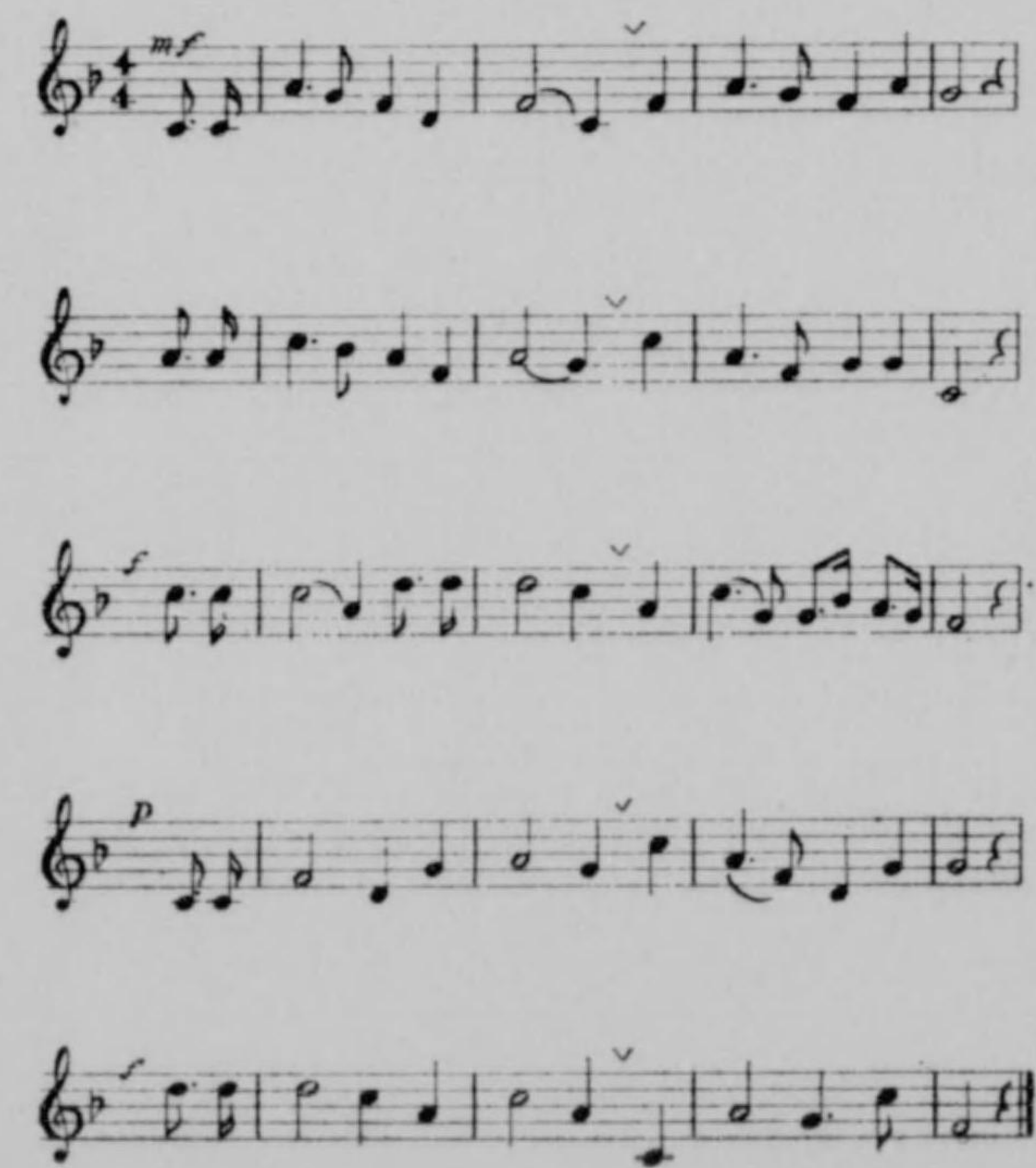
校訓の旗



校門と校歌



校歌



校歌

宮山隆三作歌  
小部卯八作曲

一、櫻々崎の花の色  
伊中健兒の象徴なる  
希望の光あふれたり

二、六甲西にそり立ち  
猪名の流れば南して  
これぞ我等が啓示なる

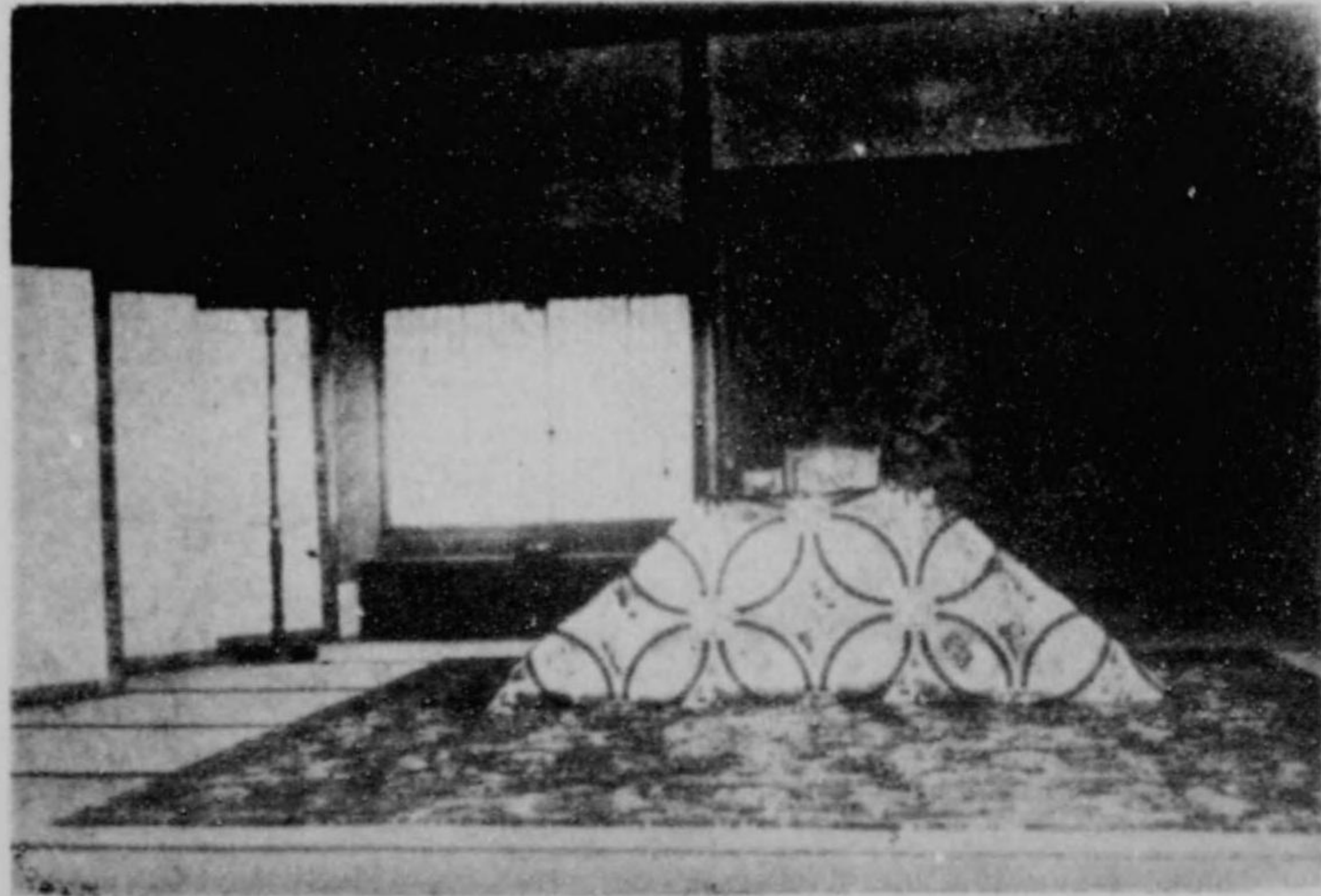
三、理想の光見極めて  
かざして強く進まなん  
奮へや共に手を取りて

これぞ血に湧く青春の  
明けゆく空に照り映えて

雲を震はし風を呼ぶ  
末茅海の波をあぐ

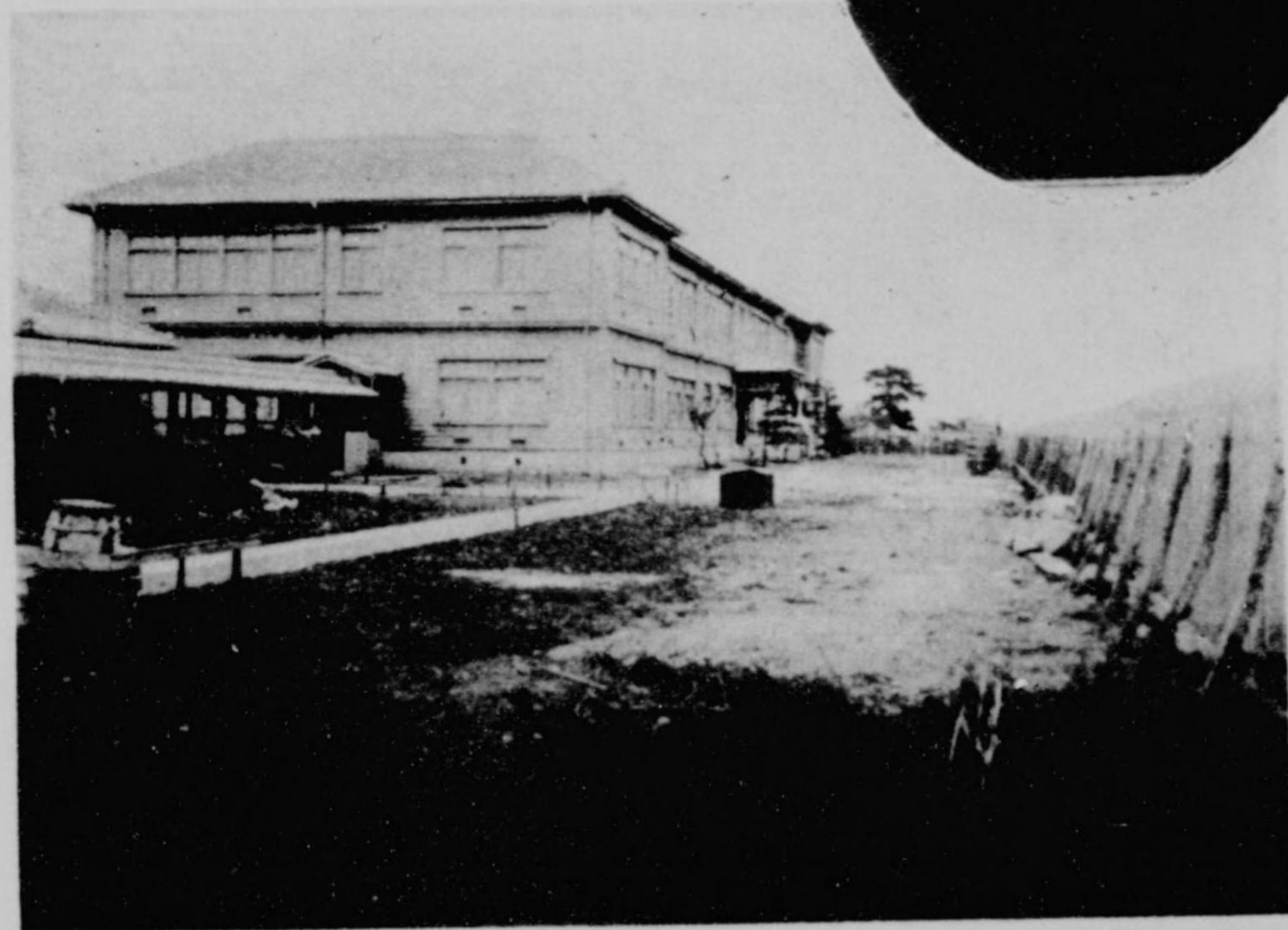
剛健の徳燃ゆる意氣  
覺むるは今ぞ若き人

東宮台臨記念碑



東宮殿下御座所  
(小西新右衛門氏別邸)

創立明治三十三年四月



創立當時の校長住先生



前校長 澤三先生



前校長 滋賀先生



大正二年十二月



大正六年十二月

戰勝記念

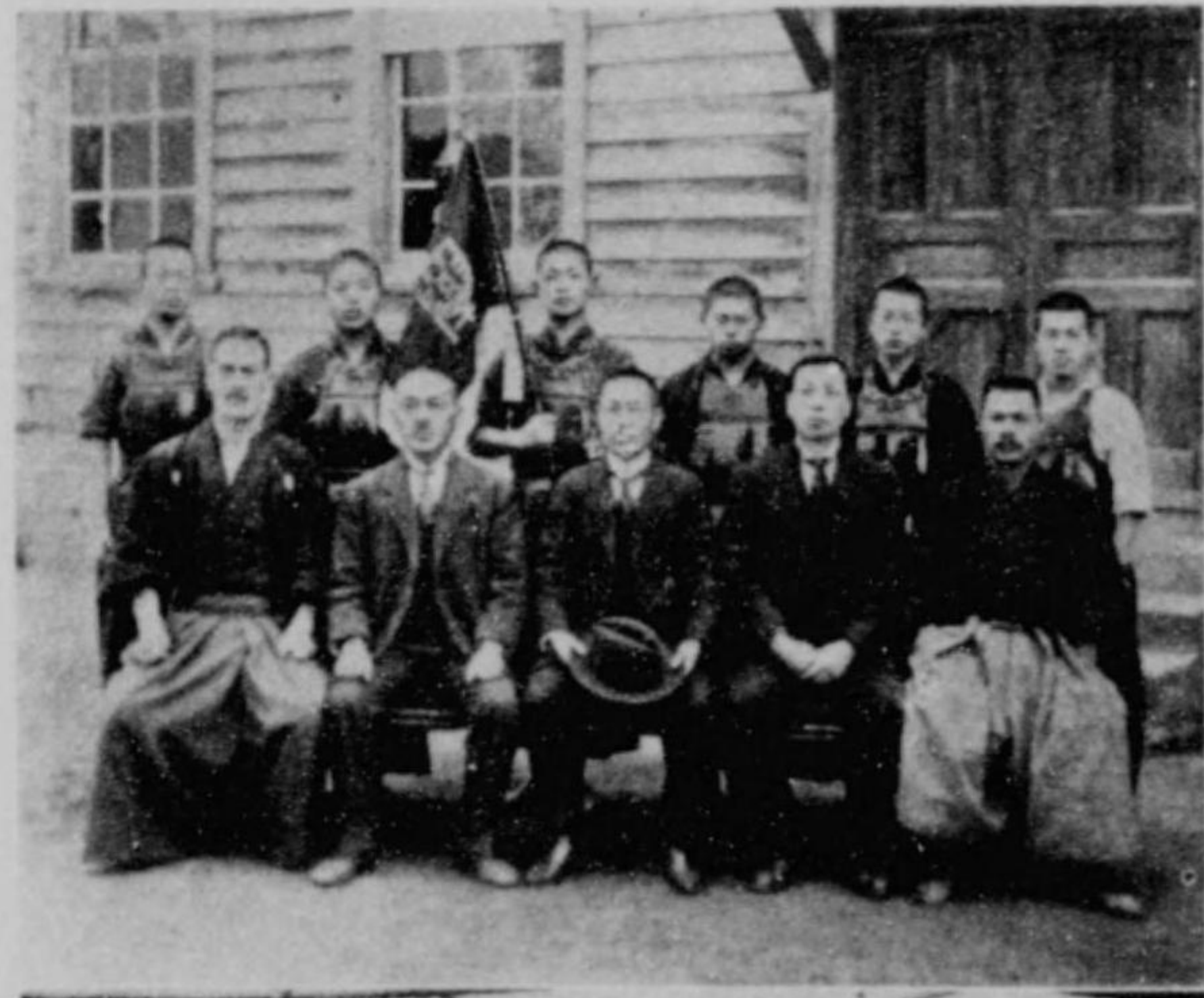




生先原江 長校前



生先形小 長校前



大正十二年二月

戰勝記念



大正十一年十一月



生先田森 長校現



生先部阿 長校前

大正十一年十一月



戰勝記念

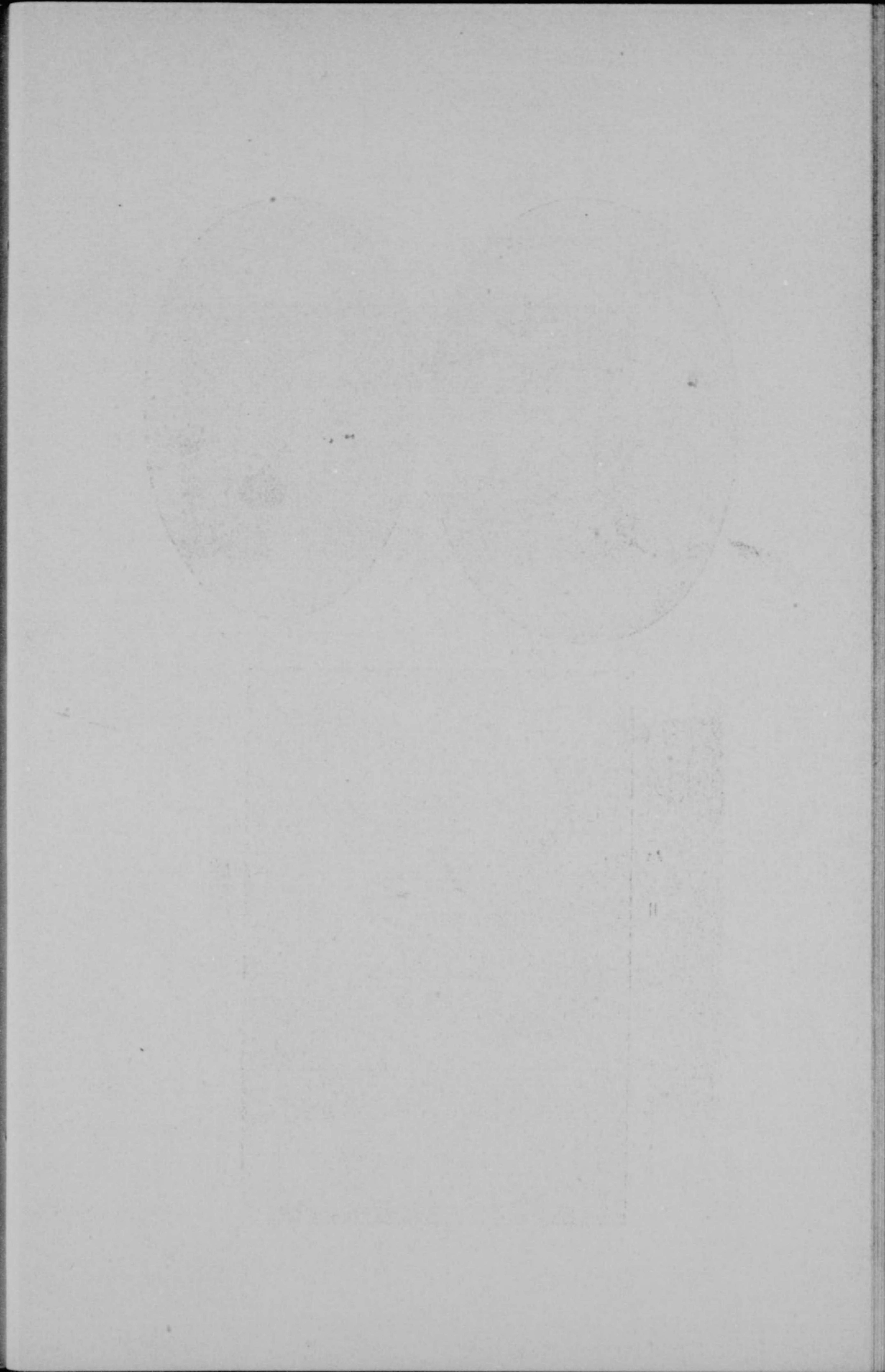
大正十三年十月



講  
堂



本館の  
前庭





目次

一、兵庫縣立伊丹中學校沿革略	一
一、舊職員一覽表其他各種統計表	六
一、校友會組織ノ發達ト其ノ經費	三
一、各部沿革史	六
一、本校教育ノ現況	五
イ、教育施設	五
ロ、教授方針	六
一、現職員及各種調査表	八
一、戊辰會	九
一、櫻窓會	一〇

### 兵庫縣立伊丹中學校沿革略



本校ハ明治三十五年四月ノ創立ニシテ全年二月千住武次郎氏校長ニ任ゼラレ創立事務所ヲ兵庫縣廳内ニ置キ全年四月川邊郡役所ニ移シ五月更ニ新校舎ニ移ス。五月五日開校式ヲ舉行シ此ノ日ヲ以テ創立記念日ト定ム。生徒定員三百名、全年十一月 天皇皇后兩陛下ノ御眞影ヲ奉戴ス。

明治三十六年一月八日校訓ヲ制定シ式日等ニ之ヲ朗讀スルコトトス。

明治三十六年五月四日校旗新定式舉行。

明治三十六年六月六日寄宿舎落成式ヲ舉行ス。

一、明治三十八年十月二十日平和克復大詔捧讀式ヲ舉行ス。

一、明治四十一年生徒定員ヲ四百名ニ増加ス。

一、明治四十一年十二月校長千住武次郎氏退職、四十二年一月群馬縣立富岡中學校長滋賀莊三郎氏本校校長ニ任ゼラル。

一、明治四十三年生徒徳性涵養ノ三徳目トシテ「誠實」「克己」「忠恕」ノ三項ヲ定メ、井上圓了博士揮毫ノ扁額ヲ講堂ニ

掲グ。

一、明治四十四年十一月十七日乃木大將本校ノ授業ヲ參觀セララル。

一、明治四十四年十一月二十日、第四、第十六兩師團對抗演習ノ際、大正天皇未ダ皇太子ニテマシマセシ折、行啓ノ光榮ニ浴シ、生徒ノ學業成績、健康狀態、處罰者ノ有無等ニツキ種々御下問ヲ賜ハル。當日生徒ノ合同体操ヲ台覽遊バサレタリ。翌二十一日御眞影ヲ御下賜遊バサル。依ツテ奉戴式ヲ舉行シ、職員生徒ハ大イニ盡忠報國勉勵努力以テ此ノ光

榮ニ酬イ奉ランコトヲ期ス。十二月十日伊丹町猪名野神社ニ於テ伊丹町行啓奉祝記念會アリ。

- 一、明治四十五年二月十一日紀元ノ佳節ヲトシ、皇太子殿下台臨記念碑ノ除幕式ヲ舉行ス。「東宮台臨記念碑」ノ七文字ハ乃木大將ノ書ニシテ、碑背ノ銘ハ本校教諭齋藤梢氏ノ撰文ナリ。當夜伊丹町三本松七福座ニ於テ行啓記念通俗教育講演會ヲ開催ス。

一、全年四月校長滋賀莊三郎氏朝鮮京城普通學校ニ轉任。全年四月三澤力太郎氏本校校長ニ任ゼラル。

一、大正元年九月武道教室落成ス。十一月十五日行啓記念第二回通俗教育講演會ヲ開催ス。

一、大正三年内庭ニ池ヲ設ケ風致ヲ整ヘルト同時ニ非常時ニ備フルコトトス。

一、大正四年生徒定員ヲ四百五十名ニ増加ス。全年十月二十七日 天皇陛下ノ御眞影ヲ奉戴ス。全十一月御大禮記念トシテ本館ノ前面ニ築庭ス。左右境堤ノ櫻樹ハ卒業記念トシテ植樹ス。

一、大正五年二月一日 皇后陛下ノ御眞影ヲ奉戴ス。

一、大正六年十二月二十四日 皇太子殿下ノ御眞影ヲ奉戴ス。

一、大正七年四月生徒定員ヲ五百名ニ増加ス。

一、大正八年四月ヨリ繼續事業トシテ生徒定員ヲ七百五十名ニ増加ス。

一、大正九年一月二十日校長三澤力太郎氏秋田縣立秋田中學校ニ轉任。全年二月九日宮崎縣師範學校教諭小形留吉氏本校々長ニ任ゼラル。十月三十日勅語渙發三十周年記念式舉行。全年新校舍落成ス。

一、大正十一年理科學實驗室ノ設備成ル。開校二十周年記念トシテ混泥土路ヲ設ク。

一、大正十二年十月十三日校長小形留吉氏臺灣總督府臺南師範學校ニ轉任。全日本校教諭大澤善太郎氏校長事務取扱ヲ命

ゼラル。全年講堂ヲ増築ス。

一、大正十三年三月四日兵庫縣立龍野中學校校長江原義平氏本校々長ニ任ゼラル。全日大澤善太郎氏校長事務取扱ヲ免ゼラル。全年四月十日東宮殿下御成婚記念ノ爲メ校友會ノ事業トシテ記念文庫ヲ開設ス。十一月十日國民精神作興ニ關スル詔書渙發セラル依テ捧讀式ヲ舉行シ、生徒ヲシテ詔書ヲ謹寫セシム。

一、大正十四年三月寄宿舎ヲ廢シ建物ノ北部一棟ヲ取拂フ。四月元寄宿舎ノ炊事場ヲ劍道教室ニ改築ス。同年同月學校教練實施篠山歩兵第七〇聯隊陸軍歩兵大尉宮宇地辨三郎氏配屬將校トシテ就任。

一、大正十五年教育綱領トシテ「誠實」「勤勉」「剛健」「三綱領ヲ定ム。

一、大正十五年九月十七日校長江原義平氏退職。同月兵庫縣立鳳鳴中學校校長阿部常次氏本校々長ニ任ゼラル。

一、昭和二年三月配屬將校宮宇地辨三郎氏篠山歩兵第七〇聯隊中隊長ニ轉補、同年四月同聯隊歩兵大尉西村熊市氏就任セラル。同年弘道館文化會長嘉納治五郎氏揮毫ノ「精力善用」「自他共榮」ノ扁額及ビ近衛文麿公ノ「克忠克孝」服部一三氏ノ「自強不息」ノ扁額ヲ講堂ニ掲ゲ大日本武德會長本郷房太郎大將揮毫ノ「經文緯武」ノ扁額ヲ劍道教室ニ掲グ。

一、昭和三年二月二十六日兵庫縣立伊丹中學校戊辰會ヲ創設。同年御大典記念トシテ奉安庫ヲ講堂ニ設置ス。

一、同年十月二十八日兵庫縣立伊丹中學校櫻窓會ヲ創設ス。

一、昭和四年六月五日大阪城東練兵場ニ於ケル御親閱式ニ參列ス、櫻窓會ニヨリ校旗ヲ新調シ晴ノ御親閱式ニ參列、記念綬ヲ受ク。

一、昭和四年七月二十五日校長阿部常次氏退職、同月同日佐賀縣立三養基中學校校長森田勝平氏本校々長ニ任ゼラル。同年實業科、音樂科ヲ加設シ戊辰會ヨリピアノヲ購入ス。

一、昭和六年一月十五日天皇皇后兩陛下ノ御眞影ヲ奉還ス。  
 一、昭和六年一月二十二日天皇、皇后兩陛下ノ御眞影ヲ奉戴ス。  
 一、昭和六年三月配屬將校西村熊市氏篠山步兵第七〇聯隊中隊長ニ轉補、全四月步兵少佐安達清作氏就任セラル。

### 舊職員一覽表

(就職順)(●印ハ死亡者)

職名	姓名	在職期間	出身府縣
校長	千住武次郎	明治三五、二	佐賀縣
書記	岡村龜太郎	明治四一、一一 三六、五	兵庫縣
教諭	倉賀野胤正	三三、三	山口縣
〃	高橋幾藏	三五、三	山縣
〃	片山尙夫	三五、四	岐阜縣
〃	甲木儀次郎	三五、四	福岡縣
〃	舊姓島谷 前田壽範	三五、四	兵庫縣
書記	川里種七郎	三五、四	〃
教諭心得	辰巳注連吉	三五、四	〃
助教諭心得	中野碩	三五、四	〃

教諭	中村英太郎	明治三五、九	福井縣
教諭心得	住友彦太郎	三六、三	德島縣
教諭	稻葉茂	三六、四	岐阜縣
書記	橋本啓太郎	三六、四	福岡縣
〃	河村神三	三六、五	山口縣
〃	大森愛惠	三六、八	京都府
〃	米澤寅一	三七、三	兵庫縣
助教諭	梁田忠山	三七、四	〃
〃	三宅半三郎	三七、四	岡山縣
〃	山口國三郎	三七、四	佐賀縣
教諭心得	太田照應	三七、四	兵庫縣
書記	大塚寬藏	三七、六	大阪府
校醫	堀内善藏	三七、一〇	兵庫縣
校醫	弓場五郎	三七、一二	兵庫縣
校醫	苗村菊太郎	三八、一	〃
教諭	平野俊一	三八、三	〃



職名	姓	在職期間	出身府縣
助教諭心得	仲田 安吉	明治四〇、九	兵庫縣
書記	高石 常太郎	明治四一、三	大阪府
書記	三上 節造	明治四一、三	廣島縣
書記	德山 安太郎	明治四一、四	愛知縣
書記	賀集 純三	明治四一、五	兵庫縣
書記	高橋 慶藏	明治四一、九	秋田縣
校長	高槻 榮吉	明治四一、一二	兵庫縣
校長	滋賀 莊三郎	明治四一、一二	長崎縣
校長	阡陌 堯一	明治四二、三	兵庫縣
校長	吉井 五	明治四二、四	千葉縣
校長	杉本 辰吉	明治四二、四	和歌山縣
校長	豐田 利一郎	明治四二、四	兵庫縣
校長	梶浦 龍應	明治四二、四	兵庫縣
校長	庄野 繁治	明治四二、一	德島縣
校長	古東 謙吉	昭和六、三	兵庫縣
校長	齋藤 梢	大正七、一	大阪府

職名	姓	在職期間	出身府縣
教授嘱託	坂本 哲郎	明治三八、四	兵庫縣
教授諭	田原 龜一郎	明治三八、四	佐賀縣
教授諭	小松 市郎	明治三八、四	長崎縣
助教諭心得	久保田 愿	明治三八、四	兵庫縣
助教諭心得	古出 武進	明治三八、七	德島縣
助教諭心得	淺野 寅次郎	明治三八、七	岐阜縣
助教諭心得	村井 八藏	明治三九、四	愛知縣
助教諭心得	狹間 俊雄	明治三九、四	大分縣
助教諭心得	牧野 良平	明治三九、九	岐阜縣
助教諭心得	松田 勇太郎	明治三九、一一	兵庫縣
助教諭心得	中久木 富次郎	明治三九、一二	東海府
助教諭心得	平岡 太次	明治四〇、三	兵庫縣
助教諭心得	吉田 新吉	明治四〇、四	兵庫縣
助教諭心得	星野 五郎	明治四〇、五	佐賀縣
助教諭心得	川瀬 辨道	明治四〇、八	京都府





職名	就職者數	轉免退職死亡者數	現在數
學 校 長	七	六	一

創立以來職員調

職名	姓名	在職期間	出身府縣
校長	阿部常次	大正一五、九	岡山縣
教諭心得	佐藤昌基	昭和六、三	岡山縣
配屬將校	里見一郎	昭和五、五	岡山縣
配屬將校	西村熊市	昭和六、三	東京府
書記	マルカム、ヘンリ	昭和五、三	東京府
教諭	中野秀藏	昭和五、七	鳥取縣
教諭	前川誠一	昭和四、四	兵庫縣
教諭	國川三次郎	昭和五、三	大阪府
教諭	秦正人	昭和六、五	廣島縣
教諭	山浦新治	昭和五、一	靜岡縣
教諭	前田利雄	昭和六、三	兵庫縣

職名	姓名	在職期間	出身府縣
校長	江原義平	昭和一一、九	岡山縣
教諭心得	鶴野小一郎	昭和七、三	大阪府
教諭	岡田茂	大正一四、三	兵庫縣
教諭	三浦晋	昭和四、三	大阪府
教諭	シ、ヴィ、ロス	大正一五、三	兵庫縣
教諭	小林雄一	昭和二、三	兵庫縣
教諭	沖中薰	昭和三、三	兵庫縣
教諭	鈴木廉作	大正一五、八	大阪府
教諭	毛利譽	昭和五、三	兵庫縣
教諭	中津平三郎	昭和三、一	兵庫縣
教諭	鈴木裕楠	昭和二、九	和歌山縣
配屬將校	森本辨三郎	昭和二、三	香川縣
配屬將校	石澤命達	昭和五、三	奈良縣
配屬將校	テイ、ビ、ヒツチ	昭和四、一	京都府
配屬將校	菱木一	昭和四、一	京都府

年 度	志 願 者 數	入 學 者 數	入 學 者 一 人 二 對 ス ル 競 争 率
明治 三十九年度	二四〇	七七	三、一一
四十年	三五九	七五	四、七八
四十一	三二三	九五	三、四〇
四十二	二四七	九六	二、五七
四十三	一九七	一一五	一、七一
四十四	二四〇	一一〇	二、一八
四十五	二八八	一〇七	二、六九
大正 二年度	二六一	九一	二、八六
三年度	二八六	九四	三、〇四
四年度	三〇六	一〇五	二、九一
五年度	三〇一	一〇九	二、六六
六年度	三五〇	一〇〇	三、五〇
七年度	四一〇	九五	四、三一
八年度	五〇三	一五一	三、三三
九年度	四〇七	一四二	二、八六
十年度	四八六	一四九	三、二六

### 入學志願者及入學者調

年 度	志 願 者 數	入 學 者 數	入 學 者 一 人 二 對 ス ル 競 争 率
明治 三十五年度	二七二	八〇	三、四〇
三十六	一二七	七二	一、七六
三十七	一〇三	七八	一、三二
三十八	三〇九	九一	三、三九

職 名	就 職 者 數	轉 免 退 職 死 亡 者 數	現 在 數
教 諭	一四	八	二六
教 諭 心 得、 教 授 囑 託	三三	三三	〇
配 屬 將 校	三	二	一
雇 外 國 人	六	六	〇
學 校 醫 生	四	三	一
書 記	一三	一	二

次年	卒業	順市	市戸神	市宮四	市崎尼	市石明	郡邊川	郡車武	郡馬有	郡石明	郡市其他	大阪府其他縣	計	者亡死内
明治四〇年	〃	一	三	一	三	二	二	三	四	二	二	二	二六	三
四一年	〃	二	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	二九	八
四二年	〃	三	二	一	一	一	一	一	一	一	一	一	三八	九
四三年	〃	四	三	一	一	一	一	一	一	一	一	一	三五	四
四四年	〃	五	三	一	一	一	一	一	一	一	一	一	四四	〇
四五年	大正	六	六	二	三	二	一	二	三	二	一	二	四七	四
元年	〃	七	三	一	四	一	〇	四	五	二	四	二	四三	七
二年	〃	八	四	二	一	一	一	五	三	二	四	二	四八	一
三年	〃	九	四	二	一	一	一	六	三	二	四	二	五八	一
四年	〃	〇	四	二	一	一	一	八	五	二	四	二	六五	七
五年	〃	一	六	二	一	一	一	八	五	二	四	二	七五	一
六年	〃	二	四	二	一	一	一	八	五	二	四	二	八五	一
七年	〃	三	七	二	一	一	一	四	五	二	四	二	七五	〇
八年	〃	四	一	二	一	一	一	六	五	二	四	二	七八	二
九年	〃	五	四	三	一	一	一	六	五	二	四	二	八三	七
一〇年	〃	五	四	三	一	一	一	七	六	二	四	二	九〇	六

### 卒業生郡市別

年	度	志願者數	入學者數	入學者一人ニ對スル競争率
大正	十一年度	四七八	一五二	三、一四
〃	十二年度	四三七	一四三	三、〇八
〃	十三年度	二五四	一四二	一、七八
〃	十四年度	二六七	一三七	一、九五
〃	十五年度	二二四	一三九	一、六一
昭和	二年度	二四七	一四四	一、七七
〃	三年度	二五七	一四四	一、七八
〃	四年度	二一八	一四六	一、四九
〃	五年度	二一三	一四四	一、四七
〃	六年度	二四二	一五八	一、五三
〃	七年度	四二〇	一五九	二、六四













## 校友會組織ノ發達ト其ノ經費

一、明治三十五年六月十九日組織 假規則制定

1、會員 特別會員(本校職員)

通常會員(在學生徒)

2、役員 會長一名(校長ヲ推戴ス)

幹事長一名

(特別會員中ヨリ委嘱)

幹事 三名

評議員若干名(特別會員全部)

委員 若干名(通常會員ノ互選ニヨリ會長之ヲ命ズ)

日常遊技(庭球、野球、擊劍、柔道、弓術。但シ便宜増減ス)

大小運動會(大運動會 春季一回 小運動會 毎月一回)

談話會(毎月一回)

4、會費 通常會員 月額十錢

特別會員 俸給月額ノ百分ノ一

二、明治三十九年四月、創立滿四年ニ達シ生徒定員ニ滿チタルヲ以テ新ニ規則ヲ制定シ活動ノ礎地ヲ作ル。

1、會員 特別會員(本校職員)

通常會員(在學生徒)  
贊助會員(本校ニ縁故アル者、卒業生及半途退學者)

## 2、役員

會長(校長ヲ推戴ス)

副會長(首席教諭ヲ推ス)

部長三名(特別會員中ヨリ委嘱ス、任期二ケ年)

委員三十名

運動部

野球……六名  
庭球……六名  
武術……七名

四、五年級ノ生徒中ヨリ之ヲ命ズ、任期一ケ年

文藝部……六名

會計部……五名

評議員會 (特別會員ヲ以テ組織ス)

## 3、事業

日常運動

毎日放課後之ヲ行フ、欠席セントスル者ハ届出ヅベシ。  
一年級ハ野球、庭球。  
二年級以上ハ劍柔ノ中一種ト野球、庭球ノ内一種ヲ選擇ス。

大運動

陸上運動會  
庭球大會  
野球大會  
武道大會

談話會 隔月一回

## 事業遂行ノ三部

運動部……野球、庭球、劍道、柔道、蹴球、クロツケ

文藝部……談話、報告書編纂、ソノ他雜務

會計部

## 4、會費

イ、特別會員 俸給月額ノ二百分ノ一

ロ、通常會員 月額二〇錢

ハ、贊助會員 年額三〇錢

以上ノ如キ基礎ノ上ニ建テラレタ我ガ校友會ハ其後逐年運動各部ノ派生ト文庫、園藝、給品、喇叭鼓隊等ノ新設ナドガアツテ今日ノ大校友會ヲ形成スルニ至ツタノデアル。校友會經費ノ膨脹ハ勿論會員數ノ増加ニ正比例スルモノニハ違ヒナイガ、創設當時特別會員、通常會員ヲ合セテ僅カニ九〇名支出總額八拾六圓餘ニ過ギナカツタモノガ、會員數七〇〇名支出總額五千圓ニ垂ントスル大世帯ノ現狀ナノデアル。其ノ間事業ノ發展ト經濟上ノ關係カラ會費増徴ノコトガアリ從ツテ規則ノ一部モ改正セラレテ井ル。

即チ明治四十三年度ノ規則改正ニハ、從來ノ會費月額納付ヲ該學期分取纏メテ前納スルコトニナリ且ツ新入會員ハ入會金トシテ一圓、卒業生ハ基金トシテ一圓ノ釀出ヲスルコトニ定メラレテ井ル。而シテ現在デハ入會金ヲ三圓トシ會費ハ年額六圓五拾錢デ三期分納トナツテ井ル。今試ミニ、校友會組織ノ發達ト其ノ經費トヲ表記スレバ左ノ通りデアル。

## 各部沿革史

### 文藝部

本部の創設は言ふまでもなく明治三十五年六月十九日創定の校友會假規則第十七條第三項の談話會として呱呱の聲を挙げ爾來四ヶ年の試練を経て明治三十九年四月こゝに始めて確然たる校友會規則第十條第二項に文藝部の冠稱を得て登録しその業務も談話會報告書編纂其の他の雜務も定められた。そして初代部長に阪本哲郎先生が就かれ岩田順三松榮重治武間享一谷垣徳次郎中田仙治鷺尾秀太郎の諸君が委員としてあけられてをる。業務が定められたもの、主に談話會が中心であつたやうである。それが殆んど毎月行はれた事やある時はA Bの二組に別れて討論會なごの盛んに行はれた事は熱心の度も伺はれる。又「獅子との戦」「海賊島」「何糞」などの演題を見うけるのは此頃のそれと對比して面白いものである。

文藝作品が紙上に顔を出し初めたのは明治四十年(第三

卷)からである。日露戦勝後の滔々と押しよせた景氣の波は自然この方面にも影響したかに思はれる。感傷的な新体詩や文章或は俳句なきを見うける事が出来る。

明治四十一年(第四卷)頃から漸次文藝方面に長足の進歩を促し、眩爛の花を咲かした時代だと思ふ。その反對に談話會の方はだんく下火になつて月々一回のが一學期一回となり大正二年(第九卷)に至つては談話部の名稱は亡せて文藝部と堂々名前を連ねる様になり所謂十年一昔の第一期を終る事となつた。

一時盛んであつた談話部は文藝部となり衰微を辿りつつ餘喘を保つて居つたが大正四年(第十一卷)になつては全く紙上から姿を消してしまつた。

さればと言つて文藝作品に見る可きものあるかといふに唯々申譯的に各級二三名づゝの作文が會誌の埋草となつて居るにすぎなかつた。あまつさへ大正九年(第十六卷)に至つてこの僅かの作品すらも影を失せて唯々卒業生の華かな消

息文を載せるのが文藝部の人達の役目であつたらしい。會誌の頁數の如きもだんく減されて只の六十八頁となつてしまつた。一榮一衰の理は天地萬物共通の理この衰微の我部も大正十年(第十七卷)に至つて再び反撥して来た。即ち

八年間も姿を見せなかつた談話會の復興があり、次の年の大正十一年(第十八卷)には校歌募集が一轉機となつて俄然文壇復興の導火線となつたかくして第二期の大正十三年(第二十卷)を終つた。

爾來今日に至るまで文壇に辯論に殆んき並行の状態で行なってきた。中で特筆す可き事は辯論部が對外的に發展するの機會を得た事である。昭和三年(第二十四號)始めて我部の生徒は他校の招待に應じて舌端を開いた。この機運はいやが上には辯論の發達をきたし昭和六年(第二十六號)には他校を招待するまでになつた。かくの如き機運はやがては文藝部よりの獨立の端緒となるではあるまいか。

此の間にあつて下積の様な編輯の仕事は幾度も繰返され丁度本年で二十七回を迎へんとしてをる。

願ふに本部が創立されてより部長を送迎する事六代各部の搖籃時代にありて獨立豫算を貰つたのは實に唯一の我部で明治四十二年金壹百二十一圓三十七錢であつた。かく

て幾變遷現今金四百貳拾五圓までになるには進歩の跡を見ることが出来ると思ふ。

### 剣道部

剣道は學校の創立と殆んど同時に其第二學期の末頃に運動部として生聲を揚げたもので其當時は職員を特別會員とし生徒を通常會員として特別會員は月俸百分の一を通常會員は毎月金拾錢を支出して運動種々の費用に充當致したもので隨て豫算等も實に少額にて防具の如きは全部生徒より出金させて年々何組分かを購入以て共同使用し其他の設備に就ても随分苦心致した様であります。運動部長は甲木先生で委員は生徒中より七名を撰んで之に命じ現今の銃器室の一角に於て稽古致したのであります。而て専ら斯道の發達に務めたのであります。今左に其當時の委員の氏名をあげれば

三輪谷藤平、石本義知、鹽谷通行、野草耕作、籾内淳治、笠松藤一郎、初田善三郎の七氏が最初の委員であります。以上の諸氏は當町修武館の關係か入學の當初より相當以上の技術を有し専心能く部の爲に盡し生徒部員をして

十分稽古練習に努力を致して居られます。教師は修武館の先生で現今大日本武徳會劍道範士たる富山圓氏及故教士岡本七太郎氏の兩名に囑託致して教授を乞ひ之亦親切に熱心なる教導を致され本校劍道は其名を爲すに到りました。

明治三十六年に校内の第一回試合を手初めとし選手は近隣の諸學校の大演武會に出演し夫れ々勝を得たのみでなく京都武徳會本部の大會等にも出演致して勝を得る等實に最上の成績を得て居ります。其後生徒数の増加に依り武術も劍道部柔道部と分離致しました。随つて稽古場も狹隘を來したるに依り講堂に於て稽古を致す様になり准正科として行ふ事になりました。此の間當町の修武館長小西新右衛門氏は常に斯道の向上を援助し試合等の節は賞品を寄贈する等其功績没すべからざるものがあります。

偕て最初より現今に到る間即ち三十年の内には我が部にこつても幾多の變遷がありました。その中で特筆せねばならぬことは大正元年九月に武道場が新築されたことであり、即ち今の柔道場養眞館であります。新築の當時は劍道も此の道場に於て教授して居たのでありますが追々生徒の数が増加致されたので現今の教室に移したのであります。大正四年四月廿二日修武館の名譽教師大日本武徳會劍道範

士田宮流の眞貝忠篤先生が御臨場被下て時の選手及部員等に自ら稽古し終了後有益なる訓話を致されました事を光榮と存じます。偕て物の盛衰は世の常でありますが我劍道部も其例に洩れず時に依り年に當て此の卅年間は盛なるあり衰ふるあり、幾多の變遷は有りましたが、常に全國中等學校の上位に有た事を確信致して居る次第であります。卒業生中には武徳會の有段者も多數あり又武徳會の試験を受ざる者にも有段者と認むる人は多數あります。現に武徳會本部の四段又は五段に達し精練証を拜受した者もある譯です。本校劍道部が常に全國中等學校の上位に存在を認められ居るを證する爲左に優勝旗及優勝太刀等を獲得したる相手校及其成績を記して參考と致します。

◎大正十一年一月廿九日大阪醫科大學主催の第四回近畿中等學校優勝試合  
本校出場選手 村上武夫、藤本正司、江見一二、淵上俊治、熊谷貫一

第一回戦に四條畷中學校を敗り、第二回戦に堺中學校を敗り、第三回戦にて關西學院中學校を敗り、第四回戦にて神港商業學校を敗り、第五回戦にて神戸育英商業學校に勝ち優勝旗は本校の獲得する處となる。此の試合に於ける

る大將の試合實に四十分の長きに到り熊谷の面見事に勝を得。

◎大正十一年十一月十二日大日本武徳會兵庫支部縣下中等學校劍道優勝大會

出場選手 額田敏夫、三崎悅治、江見一二、村上武夫、淵上俊治

第一回戦に第一神戸中學校を敗り第二回戦に三田中學校を敗り、第三回は不戦勝第四回に縣立商業學校を敗り、第五回戦に姫路中學校に勝、優勝旗は本校之を獲得す。

此の試合は大將に於て同点となり、更に一本勝負を行ひ本校の淵上見事勝を得。

◎大正十三年十月十二日大阪高等學校主催第一回關西中等學校劍道優勝大會

出場選手 原田一郎、川原上一夫、田中實、中西駒三、松本敏夫

第一回戦及第二回戦は共に先鋒原田にて難なく敗り、第三回戦十津川中學校を敗る第四回戦は不戦勝第五回戦岡山中學校を敗り第六回戦京都東寺中學校に勝ち榮譽ある優勝太刀は本校の得る處となる。此の試合では優勝は十津川中學校ならん第一、二回戦にては風評せられたもので東寺中

學亦強敵最後の松本の面功を奏し勝を得。

◎大正十三年十月十七日京都同志社大學主催第四回全國中等學校優勝劍道大會

出場選手 光木兌、川原上一夫、田中實、中西駒三、松本敏夫

第一回戦に京都立命館中學校を敗り、(中堅田中にて)第二回戦高野山中學校を敗り(副將中西にて)第三回戦神戸一中も亦中西の敗る處となり、第四回戦十津山中學校を敗り、第五回戦に京都第二中學校を敗り、第六回戦に滋賀八幡商業を敗り優勝旗は本校の得る處となる。

此の試合は實に中西の目覺しき働きあり、松本亦能く戦ひ一時間と二十分の長きに渡れり。

◎昭和四年尼崎尋常高等小學校主催第一回御大典記念劍道優勝大會

出場選手 松浦幸夫、光木兌、阪戸啓吉、大川忠雄

第一回は不戦勝第二回に姫路師範學校、第三回戦神戸商業學校を敗り第四回戦にて大阪北野中學校に勝ち優勝盃を獲得す。

以上は優勝のみを記したので此間准優勝までに至つたの

は實に十有餘度に及んだ。

次に現在に於ては近隣の諸中等學校及武徳殿等の試合に於ても常に中以上の成績を不失生徒中に有段者及一二級(武徳會の)者又は同等と見るべき者數多あるに依り一層其成績の見るべきものあるを信する。尙昭和五年度より本縣立中學校は劍道を正科としたる爲に一、二年の生徒は勿論其他一般の生徒の姿勢動作技術等に於て總ての力の増進した事を特記して終りと致します。

## 柔道部

今でこそ柔道と云ひ學科の科として課せられてゐるが創立當時は武術の科柔術と稱し明治三十五年六月十九日に校友會が假組織された時に日常遊技として實施されてゐた。それもそんな考へであつたか二年以上の生徒でなければ練習する事が出来なかつた。

そして永らく武道を武術と昔めいて言つてゐたものか今でも廊下にある時間割表に「武術」の印のあるのが二三ある。

伊丹町の小西修武館の山本先生が「博物教室の南の建物

で」を記録してあるから、今の銃器室にでも疊を敷いて柔道を、疊をあげて劍道をと、隔日に行つてゐた様である。「そも、柔道は柔にしてよく豪なるべきものなり。普通一般の人は柔道は如何にして他人を投ぐるか先に研究するものなれどこれ實に大なる誤解で、正反對にもし他人に投げられたら如何にして處置すべきかと研究せざるべからず。」といふ意氣組で皮切りの委員野草、籙内、藤田、笠松の諸君が頑張つてゐた。

四年間は創立時代で年中行事の如きものも對内的のもののみで明治三十八年八月始めて京都武徳殿の第七回演武大會に籙内、藤田、野草、笠松の諸君が出場し、當時は個人勝負のみで、三本勝負「みや角」苦心した結果一本勝負を宣せられ最後に「おひおし」で見事勝を取る。なき櫻が崎の健兒の名を天下に知らしめた。團體試合になつたのは大正十四年の盛夏からである。今でこそ試合と言へば團體試合の事を思ふが、此の當時始めての團體試合なので、非常な力の入れ様で其の夏始めて「柔道衣の汗を二三回絞つた」。いふ暑中稽古まで行ひ、田中、熊城、岡部、萩原、上西、菅谷の諸君が出陣してゐる。

寒稽古は明治四十二年一月「近時文運の隆昌」と共に、世

間の青年輩の香によひ、星の光に慄れ世は冬枯れの季節となるや、口角なほ乳臭を脱せざるに閑居炬燵に暖まり三文小説に耽る風滔々として、士氣の頓廢眞に慨嘆に堪へざるものあり。小寒の節に入ると共に第一回寒稽古を始む午前六時曉雲なほ深く鎖して霜天に滿つる時驟起蒲團をはねて云々」言ふ元氣さで仲田先生は明治四十二年より大正十二年まで十數年間搖籃時代を絶大なる熱氣と變らざる根氣をもつて今日の柔道部の基礎を作られたものと言つてよい。

學校の充實に伴ひ縣へ武道場の新設を願ひ出で今日の養眞館を建てた。養眞館では、半分柔道、半分劍道として用ひてゐたが大正十年から柔道のみ道場となし、部長、參與、委員組織立て豫算も搖籃時代の柔劍兩部で百九拾六圓五拾錢也といふのを現在では柔道部のみ三百圓支出し徐々に全盛時代を出現する氣運に際した。

三浦、中津、國川、諸先生の御在職時代は全盛時代と言つてもいい。

大正十五年四月、大阪浪速中と對校試合して大將副將を残して勝ち、五月に大阪府立生野中と對校試合して四名も残して大勝といふ景氣のい、前振れで、秋に關西大學主催

全國中等學校柔道大會に松本、田澤、上西、阪本、沼田の諸君が出場し優勝戦に御影師と對戦、武運此處で盡きた。熊城、西濱の兩君が、負傷の爲め出場出来なかつたのを遺憾に思ふ。

昭和二年度には松本、田澤、青木、久保、前田、西濱、沼田の七人の有段者を有し兵庫縣下中等學校柔道大會に優勝戦に出場してゐる。此の年の七月に講道館長嘉納治五郎氏來校され、柔道大會に臨席され後精力善用の御講演があつた。

昭和四年度に龜井、梁瀬、三澤、前田、青木の諸闘士縣下中等學校柔道大會に優勝戦まで出てゐる。「先鋒龜井内股でボイと飛ばす、二將梁瀬スイと押へる、次々中堅三澤チヨイミ背負で棄てる、副將前田エイミ押へて動かさず、青木例の如し」と軽く全勝したりしてゐるが、輝やかなしい優勝旗はついに得られなかつた。が然し青木君は明治神宮競技柔道大會に出場する爲め兵庫縣少年部選士代表として出場し、萬丈の氣を吐かれたが、惜しくも第六區代表として晴れの神宮競技柔道大會場へは出られなかつた。今や君は關高に在學中高等柔道大會に堂々と勇名を轟かしてゐられる。



## 角 力 部

大正五年度角力部の部費として校友会より、豫算二十二圓を配當せられ茲に初めて角力部を創立するに至る。其の以前は神戸又新主催の須磨寺遊園地に於ける學生角力大會や大阪毎日新聞主催の堺大濱遊園地に於ける全國學生角力大會を主として其他學校及團體等の主催する學生角力大會の招きには有志の者選手として出場し其の費用校友会豫備費中より配當を受けた。

大正五年五月十四日神戸又新日報主催の學生角力大會は例年の如く須磨遊園地に開催せらる。此の日八名の選手は一騎當千の豪の者揃ひ戦はずして已に優勝旗は本校のものであつた。第一、二、三回と試合を重ねる毎に元氣旺んにして得點愈々多く遂に優勝旗選試合には松本、藤田の二選手を登場せしむるに至る。

松本は關西の古澤君と取組み敵の寄り進むを左にて踏止まり強く引き落して見事極まり松本の勝となる。次に藤田は明農の角田君と右四ツツになり敵の寄り進むを寄り返す敵吊らんを試みたるも脆くも敵の腰クダケて藤田の勝。優勝試合は同志の松本と藤田の勝負となり、松本は第一優勝

旗、藤田第二優勝旗を、尙ほ本校は参加校中勝星は第一位の二十一點と言ふ成績にて表彰旗迄も得た。

大正五年十一月十二日大阪日報主催學生角力大會は堺大濱遊園地で開催せらる。此の日の選手は須磨の大會に四海を驚歎せしめた猛者中の猛者松本、藤田、庄司、港の四名。

第一回戦に藤田、庄司敗れ、第二回に港敗れ、松本を第四回戦まで送りたるも此の日は何の悪日ぞ松本も和歌山師範の平井君に一步を譲る。

大正六年五月二十日神戸又新日報主催の學生角力大會は須磨遊園地で行はれ選手大倉、藤井、松本、藤田、坂本、宇野、安藤、岩田、此の日も可なりの成績を得たるも前年の此の須磨大會は大きな遜色があつた。宇野を優勝旗選試合に送つて残念にも關西商業の堀部君に一步を譲る。

大正八年五月四日神戸又新日報主催の學生角力大會は須磨遊園地に開かる。大正五年に第一、第二並得點表彰旗の三旗を得たる我々は自然觀衆より優勝候補の的となり、此日は阪本達也御大を初めとし有吉、平井の猛者大奮戦を続け、遂に阪本を最後の優勝戦に送り、神港商業の御大に勝を譲り、第二優勝旗を得角力部のため大に氣を吐いた。

大正九年五月五日神戸又新日報主催學生角力大會須磨遊園地に開催せらる。選手松田、藤井、大森、片山、和田、長井、大賀、橋本、平井、長谷往年に比してあまり振はず。

大正九年十月三十日大阪毎日新聞主催の學生角力大會は大濱遊園地に開催せらる。選手は橋本、大賀、平井、此日平井は優勝格と噂せられたる高知農林の大將岩田君を斃して伊丹中學校の名を天下に轟す。此のとき數萬の觀衆の拍手は急激の如し。

中村(元松本)氏は恒に當部の發展に留意せられ、本校催しの角力大會又は各方面にて行はる、學生角力大會等には選手を鼓舞激勵せられ時には自ら土俵に登り直接指導する等殊に今回は金五十圓を寄贈せられ土俵の改築に充てらる。大正十三年六月十二日盛大な土俵改築大會を行つた序に直接指導せられたる平井、鐵田の兩氏に對して特に感謝したい。

大正十四年五月十日神戸又新日報主催須磨大會に出場選手山村、吉田、高田、吉村、澤村、下實、田澤此の日奮戦苦闘して遂に下實をして個人準優勝戦に送り縣農の岩城を破り優勝戦にて姫中の上野君に勝を譲つて二等となる。

昭和二年五月八日神戸又新日報主催學生角力大會は須磨

遊園地に開催せられ選手高田、假谷、小原、川上、西良、繁益、吉村此の日奮闘の結果團體準優勝戦に入り縣立工業を破り姫商に敗をこり團體三等の優勝旗を得。

昭和二年十月十六日大阪毎日新聞主催による堺大濱學生角力大會の出場選手高田、川上、吉村、團體成績も可なりにて高田を個人優勝に送り第一、第二、第三、第四回とも連勝にて第四回戦にて優勝候補たる高知師範の山中を美事腰投にて破り準優勝戦にて此日優勝したる高知商業の久萬と激戦の後遂に力盡きて倒る。

昭和三年五月廿七日中京に於て開かれた賀陽宮殿下優勝盃争奪戦第二十三回東海學生角力大會に招かれ當部としては最初の大遠征なるに依り慎重協議の結果今回は部員の實力を認められ此の大遠征を執行する事となつた。選手は高田、川上、西良、

第一回戦、愛知一師西良、高田は火の出る様な場面を演じたが運つたなく涙をのむ。川上は立ち上るや諸はずとなり美事勝。第二回戦大垣中學。第三回岐阜商業共に全勝して元氣百倍す。次で準優勝戦に入り和歌山商業西良は得意の河津を取りにか、つたが敵の丸山もさるもの一步を譲る。高田は敵の辻を何なく寄り切つて西良の仇を復す。川上は敵

の西川を一舉にすり切つて勝。準優勝戦愛知商業西良必死の奮闘を続けしも武運つたなく敗をとる。敵の栗木君ミ力戦數合終に軍配は高田に、川上は二十餘貫の怪人市橋君を諸はすみなり一舉すり切つて土依に埋む。

優勝戦名古屋商業對伊中

西良は敵服部君を河津で後に倒さんとしたるを持出され敗をとる。

高田は敵の渡邊君をのさわ攻に土依際までおし進んで今一寄言ふところを、行司の注意により眞面目一本の高田は直ぐにわ攻を弛めるや不運にも左四ツとなり敵はすきを見て一舉に寄り進む所を高田よくのこして打ちやりを試みたがおそく實に残念、これで團體の優勝は名商のものとなつた。

川上は敵の上野君立ち上りさま上手投であつさり。吾等の切望した大遠征はわづか一點の差で優勝第二位となつた再び吾が部は此の金城下の土依に登場して優勝の日を祈る此の日川上は個人試合に登場の資格あるも翌日の授業時に間に合ふため名古屋驛を夜十二時過ぎ歸途に着く。

昭和五年七月高田氏の嚴父高田元吉氏は當部の發達に關して恒に御援助をせられ土依一ヶ所では日常の錬磨に大な

る不便を感じ更に土依一ヶ所を増築するにあたり金六十圓ミ材料の購入運搬大工の雇入等に至るまで一切を引受けられ、七月中旬新築完成を見るに至り當部の感謝に堪へざるころである。

昭和六年六月二十八日當部は學童角力獎勵の目的を以て第一回西攝學童角力大會を開催するに當り本校出身の學生角力の横綱同志社大學の菅谷氏は京都府知事より贈られた長船の銘刀を本校に寄贈せられ其の銘刀を優勝小學校に優勝を表彰するため次回まで保管せしめる事とした。

我が部は曩に平井、鉦田の二氏あり、今又卒業後毎年春夏の休暇には必ず來校せられて熱心指導せらるゝ高田氏あるは我々の何よりの幸福である。

## 庭 球 部

一、創立時代 學校創立後約一ヶ月半を経て、校友會が明治三十五年六月十九日に組織された。校友會の計畫は當分(一)日常遊技(二)大小運動會(三)談話會の三つで、我が庭球部はローンテニスの名で此の日常遊技の一部に加へられ

てゐた。そして校内最初の運動會に於て此のローンテニスが其の運動の主なるものであつた。これが後で校内庭球大會へと成長した。

此の時代には一人の先生が校友會の幹事長となり數人の幹事が共同して校友會の世話をされ、部長もなく生徒の委員も無かつた。創立後一年許り經て新に運動部長が任命されて運動部の世話をされた。庭球部といふ部が獨立せず、やはり運動部の一部分として存在してゐた。勿論軟球を使用しダブルの競技のみ行はれた。斯かる有様で約四年間續いた。小運動會の名の許に盛んに校内の庭球大會の如くわがローンテニスは行はれたのであつた。

二、獨立時代 明治三十九年四月初めて五年生が出來、生徒が定員に達したので新に校友會の規則が制定された。こゝで「ローンテニス」の名が庭球と變つた。校友會は、運動、文藝、會計の三部に分れ、各部に部長があり、生徒から冊名の委員が選ばれて、夫々其の部の世話をされた。運動部は更に三つに分れ、庭球、野球、武術となり各部各六名の委員が生徒から選ばれた。わが庭球部最初の委員は伊藤安次郎、本咲利之助、岡村英三、津田和也、藤田惟一、宮川正一の六君であつた。

次に規則の上に一年生は放課後毎日、庭球、野球の何れか一つを選んで運動し、缺席せんじするものは其都度届出つべしと表はしたのを見ると、其の頃から課外運動として庭球が相當重要視されたことがわかる。又庭球大會は五月上旬之を開く。規定された。此の頃のわが部の選手は伊藤、長谷川、安田、武田、濱野の諸君。つづいて本咲、岡村の二君であつた。

わが部の最初の他校試合は明治三十八年十月八日で、對手校は池田中學であつた。

三、全盛時代 明治四十年頃から大正十二年頃まで即ち準硬球を使用するまで全國の庭球界は正に軟球全盛時代と言つてよからう。我が部では毎年五月頃二日間に亘つて庭球大會が開催された。最初の日は校内大會並に紅白試合次の日は外來選手對本校選手の試合が行はれた。校内大會には、一年より五年まで、それに先生の有志を加へ、多い時で六十余組少い時で四十余組。いやしくもラケットを手にしたこゝの有る人は、其の技の如何を問はず、ネット高し、コート狭しと盛んに活躍したものである。そして多少なりとも本校生徒職員の體育向上に親睦融和に貢獻した。毎年數回本校選手の數組と他校との試合は觀衆興



味の中心であり、又わが部を飾る歴史の花でもあつた。今其の主なるものを年順に記して見よう。

最初の對校試合は明治四十年九月二十三日神戸高商豫科ミ五組で戦つたのが記録に残つて居る。此の戦に我が軍は武田、安田組の奮闘により勝つた。同年秋十月半天王寺中學ミ七組で戦ひ之は惜敗した。翌年の冬十二月五組の我が部員は二日に亘つて京都遠征を試みた。二中ミ同志社に負けたが其の頃の關西の雄と謳はれた京商に勝つことを得たのはせめてもの腹いせであつた。同年末神戸高商と五組で戦ひ優退一組ミ大將組不戦で大勝を博した、此の年活躍した選手の主なるものは、秋田、宮崎、芝田、籾内、濱野、安田の諸君であつた。翌明治四十二年は我が部益々盛んになり此の年の對抗試合は殆んぶ勝つた。即ち、正月早々大阪商業と七組で對し優退二と不戦二とを残して大勝し同年秋九月八尾中學ミ七組の戦も優退三不戦一の大勝であつた。又十月には桃山中學ミ五組で戦ひ我軍全勝した。此の年の活躍選手は前年からの人々に福本君位のものだつた翌四十三年頃から我部も少し衰へかけて來た。それでも茨木中學と六組の戦及關中と五組の試合に三組残して共に勝つた。此年活躍したのは前岡、宮崎組であつた。

大正二年初めて大阪毎日新聞主催の全國中等學校庭球大會が開かれた。爾來毎年の夏大阪府下の濱寺公園に於て開かれ、この大會は全國庭球界に其の名をうたはる唯一の登龍門となつた。此の榮譽ある大會の第一回に伊中庭球部からは、六島、岸本の兩君が出場した。一回戦に花園をストリートでやぶり、第二回戦に於いて優勝した御影師範に惜敗した。初め二ゲーム得点して優勢であつたのに如何なるハヅミか後の三ゲームを續げざまにさられた。若し御師に勝つたら優勝の榮冠を得られたであらうと思へば誠に残念な試合であつた。此の年の暮近く御師の五組の對校戦では我が大將組六島、岸本の兩君は此の夏の無念を晴らすべく奮闘し、その結果見事に勝つて夏の復讐のみならず、いつも御師に壓迫されてゐたのを久し振りで溜飲を下けた。其の後わが庭球部はあまり振はなかつたが大正五年から六年にかけて、我が部初まつてから此までない全盛時代が出現した。

大正五年の秋半は大阪體育協會主催の庭球大會が觀衆多き天王寺公園に行はれた。わが部の梶本、良本組は優勝戦に大工をやぶり、花壇や賞品を貰つて來たのは獨り兩君の誇りでなく我部の歴史を飾る記録であつた。翌大正六年

三十七勝十七敗といふ他校試合の成績を見ても、試合數から見ても、わが部の全盛期といふても過言でない。此の時代の聞えた選手は梶本、良本組を御大さして竹内、三輪、淵上、橋本、佐藤、堀江、松本、隱岐、秋岡の諸君で、強敵御影、池田の兩師範に全勝し、關西に於ける我が伊中の名を知らしめた。

其の後大正十二年準硬球時代になる迄この軟球は續いたが、我部は大正七年頃から漸次衰へて行つた。大正十一年頃、丹田、川瀬の兩君につゞいて前田中野藤原大内の諸君が活躍し、大正十三年には宮崎、阪本、青山、杉本の諸君の働きで十七勝五敗の成績は軟球時代の棟尾を飾るもので此年の十月姫商にて同校の大將副將を斃して優勝したのは最後の花だつた。

四、準硬球時代 大正十三年頃から準硬球が流行し出した。大阪毎日新聞社では毎年全國の中等學校の準硬球大會を此の年から開いて世界庭球界(硬球)の仲間入りする準備をした。我が部でも永い間親しみ慣れた軟球を捨て、進んで此の舉に参加した。準硬球の第一回の全國大會に於て一回戦に叡山中學に勝つたが次回には今宮中學に惜敗した。以來現在に至るまで毎年シングル一組ミダブル一組が大阪

府下濱寺公園に出場して、全國の中等學校ミ覇を争つて居るが覇業未だ成らず此まで一度も優勝の榮冠を得た事はない。その中で成績の良かったのは大正十四年度の井上、中村組ミ昭和四年度の久保、白岡組であつた。特に久保、白岡兩君は共に左利で第一回戦に武生中學つゞいて縣農、鹿商、吉野林業、松山中學を敗つた。準優勝にて平安中學に敗れた。三等賞を得てカメラに納つた誇りは我部の歴史を飾るもので一躍全國に伊中庭球部の名を重からしめた。兩君も四年故來年こそは優勝へミ期待したが久保君は同志社に入學したので、優勝の夢も破れてしまつた。大毎主催の大會で特筆すべきは以上述べた位のもだが地方的に此の附近で活躍し、伊中庭球部を恐れしめたのは何と云つても昭和四年度に於る井上中村組シングルの井上君であつた。不幸にして濱寺の大會には第三回戦に池田師範に破れ、本人は勿論、我部としても實に残念至極であつた。兩君は各地の大會に運悪くいつも三回戦か四回戦あたりまで勝つがさうしたことか優勝出来なかつた。大正十四年十一月八日庭球社主催のシングル大會は神崎川コートに開かれた。わが部からは坂本、中村、井上の三君出場した。中村君は第六回戦にて京一商の井澤君に惜しい(4-3)負をした。第

七回戦には井上君辛くも(6-5)井澤君を敗つて、友の無念をはらし、その勢で第八回戦に御師の藤野君を軽く(6-1-2)敗つて優勝した。優勝旗を得た本人の喜びは格別であつたらう。記録によれば我部で優勝旗を得たのがこれが始めてだ。

其の後昭和四年十月十三日京都高蠶主催の大会に松田、田中の兩君出場、決勝戦で池師に負けたが、二等賞を得る賞品やら花環などたくさん戴いて来たのは、落してはならぬ我が庭球部の記録である。勝つた記録はあまり残さなかつたが準硬の上手な選手は前記の人々の外に大正十五年度の青山、阪本君、昭和三年度の山名、江崎の諸君であつた。

五、硬球時代 昭和六年からポツ／＼硬球が初まつた。ボール代の高價から今まで硬球にするこゝが出来なかつたがいつまで経つてもドウさいふこゝがないので、庭球界の先輩世界的選手の諸氏は思ひ切つて、硬球へと決意したのが昭和六年だ。今や庭球界は混沌として居る。或は軟球へ逆戻りせんとするものもある。然し何としても大毎主催の大会に支配されるから、我部でも只今硬球を練習して居る。さて今後如何なる選手によつて我部の歴史が飾られること

だらう。若きスポーツ熱ある人々の活躍を期して待たんか

## 野 球 部

部の誕生

野球部の歴史は本校三十年の歴史と終始してゐる。明治三十五年本校が創立せらるるや先づ朗らかに生聲をあけたものは野球であつた。尤も開校當初に於ては野球部といふ獨立した存在はなく、運動部と總括した名稱があり、其の下に野球、庭球、擊劍等が包括されてゐた。そして當時校友会規則によつて、生徒は毎日放課後、野球庭球の何れかを選んで運動しなければならなかつたので、入學間もない第一回の一年生が新しいユニフォームを泥まみれにして、キャッチボールに歡聲を擧げてゐたことは想像に難くない。

野球部の最初の記録は明治三十五年九月八日の小運動會で、午后零時半より五時半に及ぶ簡單に書いてある。定めし一年生の試合が行はれた事と思はれる。翌三十六年には二年對一年の試合があり、一年生が十四對十一で勝つてゐるが、越えて三十年、二年對三年の試合には三年生が見

事雪辱をしてゐる。

其の年の六月十九日、對外試合こいふものを初めてやつた。相手は御影師範、當時既に一人前の立物であつた。當時の記録による「試合の經驗の少いのと、技術の劣れるため」エラー續出、十六對五の大敗に悲憤の涙を吞まねばならなかつた。

十月卅一日井上謙一君以下十八名の選手が選定されたが翌三十八年に、始めてシートが明かになつてゐる。當時生みの苦しみにあつた先輩選手が如何に野球そのものを眞剣に考へて練習に勵んだかは、當時三疊手として名聲を走せ今は陸軍少佐になつてゐられる藤田久太郎君が校友會誌に載せた一文に明かである。曰く「抑も野球は娛樂的遊戯に非ずして精神修養を主眼させるもの、野球の試合は道徳の實踐場といふべし。この技に長ぜんには萬難萬苦の簇起するあり。又カーブの球を打たんには物理学を應用せざるべからず。団体一致の協力を要するこゝ大なり。實に修身教科書を研究實行するに同等の價值ありと信ず。」と。修身教科書を實踐せんとした先輩の眞剣な努力が實に我部三十年の歴史を培うたのであつた。

密柑の木の下にヒップ／＼ブレイを高唱す。御影師範ミ

の對戦をそのスタートとする對外試合は、その後何處も戦つても成績芳ばしからず、何時も負け通し、苦盃の管め續けで當時の委員の感慨によれば「我が野球部は永い間連戦連敗、校友會誌には、やれ遺憾千萬だの捲土重來の基礎を固めよとか筆誅に筆誅を加へられ、野球こいへば敗北を聯想せしめ選手といへば弱虫視された」のであつた。然し苦節四年の努力の遂に報いられる日が来た。それは明治四十年十月十七日關學中學部との一戦に延長十回のクロスゲームの後七對五のスコアで勝利を制した時であつた。

弱虫視された野球部の見事な勝利に伊中フアンが如何に喜んだかは當時の記録に明らかである。「洋服の彌次も、着袴の彌次も、盛裝せる選手も共に／＼打交りてヒップヒップブレイ、ヒップ／＼ブレイを三唱したりき。勝利の氣四方に滿ち溢ちて密柑の香強き下に立ちて、本校の歴史を考ふれば感慨轉た措く能はず。」

晴天の輕風に送られる野球部

關學に勝つてからは、漸く油が乗つて来た。記録によれば「境遇は變化し易し、今迄は吹雪の中を登つて行く身であつたのが、忽ちにして晴天の輕風に送られる身となつた。」のであつた。「臍の緒切つて始めての遠征」に柏原迄

行つて柏原中學を三對〇でシャットアウトし、早大の元キヤプテン泉谷を始めとし、慶應の高濱、和田を其メンバーの中に含む神戸クラブを激戦の後打ち敗り、次いで宿敵御影師範を十七對九の大勝利で打ち退けたのは、明治四十一年であつた。當時の投手は池上、正中兩君、捕手は梶本君であつた。開校以來僅か六年目、漸く二回目の卒業生を出したに過ぎない弱輩チームか、阪神強剛の中に伍して、伊丹は強しの語を發せしめるやうになつたのは、勿論バッタの好守と猛打によるのであるが、兩投手の健腕と捕手梶本君の奮闘の力によるのが多かつた。

「秀れたる投手の現はれた時其チームは必ず奮ふ。」と野球語に曰ふ如く、明治四十三年以後阪神の名だ、る強チームを悉く撫で切りにした伊中野球部の壯快な奮闘の陣頭には怪腕横山投手の存在を忘れてはならない。君のひねくれたボールを打ちこなす事は仲々困難で、大抵の試合に、二安打以上を許す事は殆んどなかつた。多くは三振に敵を退けてゐた。大正二年四月對大阪商業との試合には、ノーヒット三振十の記録を残してゐる。

慶應の名外野手として、その好守好打を謳はれた高濱益

三君共に本校後進指導のため盡された方々である。北島新三君は最近數年間夏期練習に於て熱烈なる御指導御援助下さつてゐる事は特筆すべきである。

先輩の嘆き

本校は其の歴史が割合に古く、且つ野球の本場たる甲子園を目前に控へてゐるにも拘らず、一度も甲子園の檜舞臺に上つた事がない。せめては兵庫縣下の覇權でも握つて見たいといふのは、先輩選手の渴望であつた。努力しても努力しても尙酬いられない嘆きであつた。大正六年の委員は記してゐる。「吾等は毎日母校野球部の黄金時代を夢見た。而も憧れし黄金時代の現出は見る能はずして晩秋の鐘の下に慘澹たる戦の後を辿る僕には堪へ切れざる不甲斐なさが胸に迫る。希はくば新に立ちし選手諸君よ、母校野球部の爲に僕等が憧れしあの黄金時代を現出せしめられんことを祈る。榮ある六甲山の夕陽が母校原頭の凱歌に和するまきに起る快感。あゝ君、若い血潮の高鳴るを聞かずや。」

い。

コーチヤ

初めて本校に見えてコーチされたのは、明治三十九年、

雄君の名は明治四十五年頃から現はれてゐる。君は時に投手としてプレートに踏まれたこともあるが、外野手遊撃手として立ち、其の駿足を駆つて櫻ヶ崎の内野外野を馳驅せられた。打撃は當時から猛打を以て聞え、オーダーは三番三塁打をカッ飛ばして敵陣を混亂に陥れること頻々あつた。横山投手の後には、家原、宇野、重久等名投手が次々に現はれて伊中野球部を泰山の安きに置いたのであつたが、大正十二年には吉田投手がその巨軀をプレートに現はした云ふまでもなく後年法政野球部に入部して鈴木投手と共に奮戦、黄金時代の慶應を陥れ遂にリーグの覇權を握つて遠くアメリカに遠征した鐵腕投手である。在學時代からその熱球は物凄く、大正十二年五月、瀧川中學との試合に三振十五、翌十三年明星商業との一戦には三振二十五といふ日本的好記録を残してゐる。

尙、現在法政野球部の名監督として、遂に同大學を優勝せしめた藤田信男君は大正七、八年頃在學活躍せられたが惜しいかな、記録が残つてゐないのミ、病氣の爲め途中退學せられたので、その面影を偲ぶ術もない。

尙ほ岡田保、岡田義治兩君も法政野球部に活躍せられ又大西利呂君は目下法政野球部マネージャーとして名聲高く

大阪の人宮原清氏であつた。其の後先輩諸氏の後進指導のため進んでコーチに來られる方が可成り多かつた。先輩の激動が如何に野球部の發達に力を與へた事であらう。高濱橋本、宇野、高原、山本、野原、笹間、木村、伊藤、藤重藤田、岡田保、瀧本、岡田義治、松原、由良、坂上、岩田北村、北島の諸君、校外からは、慶應の神吉、瀧澤、神戸高商の高崎、寶塚協會の清水。原口、關學の川村、關大の出島諸氏が見えられ、熱心に指導して下さつた。此等の諸氏に深甚の感謝を捧げねばなるまい。

## 競 技 部

(イ) 陸上運動會

本校創立當初に於ける校友會假規則を案ずるに

第十九條 大運動會ハ一年一回春季ニ行ヒ諸種ノ競走競技

ヲ演ス

但シ臨時之ヲ行フ事モアルヘシ

小運動會ハ凡テ月一回トシ主ニ競技ヲ行フ

とあり。之によれば体育方面に相當力入れられたるを察すべし。

而して本校創立記念運動會は明治三十六年五月五日（午後一時開會——同四時閉會）行はれ、毎年春季に於て實施せられたるも、明治四十三年十月三十日教育勅語御發布二十周年記念日に開催せられてより毎年秋季に催さるゝ事とす。

その内容形式は時代の要求に伴ひ漸次餘興的演技か勝されて今日の所謂陸上競技大會及び體操會を兼ねるに至りしが、最も堅實なる形式、内容を備へたるは關東震災に對する自覺に依つて革新せられたる大正十二年十月二十日の運動會なり。組織上の改革としては一般生徒の參加競技の外に、全生徒縦に三分し（各學年三組）て赤、青、白の三團體とし各團體より等数の選手を出して競技せしむ。優勝せる團體には優勝旗を授く。

**第二十七回運動會**（昭和六年十月十八日）

（イ）選手競技種目並に成績

種目	赤	青	白
百米	7	3	1
走高跳	4	2	5
走幅跳	5	6	0
四百米	8	2	1
リレー	5	2	3
リレー	3	2	5
リレー	3	2	5
八百米	5	5	1
合計	37	22	16

（ロ）一般生徒演技種目  
體操。教練。綱引。棒倒し。川中島。二百米。四百米。八百米。八百米リレー  
障礙物。ボート競走（二年）。盲啞競走（二年）。五十三次（三年）。達磨競走（四年）。ピククリ封筒（五年）。

（ハ）外來選手競技種目

- 八百米リレー（中等學校）
- 八百米リレー（高等小學校）
- 四百米リレー（尋常小學校）

（ニ）其他

- 校友會各部リレー
- 來賓、職員競走
- 幼童競走

秋季大運動會費決算（昭和六年度）

支出之部

種目	本年度決算	本年度豫算	増比	減比
總務費	二二、〇一	一七、〇〇	五、〇一	

編成費	會場費	設備費	召集費	審判費	記録費	表彰費	接待費	學藝品費	展覽費	豫備費	合計
九、〇五	二、四四	二〇、三三	一、〇〇	二一、七〇	三六、七五	四〇、七七	〇、九六	一七、五〇	一五五、〇一	一〇、〇〇	一〇、〇〇
一〇、〇〇	四、〇〇	一五、〇〇	一、五〇	一三、〇〇	三五、〇〇	三五、〇〇	二、〇〇	一七、五〇	一五〇、〇〇	〇、九五	一、五六
		五、三三		八、七〇	一、七五	五、七七			五、〇一		
			〇、五〇					一、〇四			

（ロ）長距離競走

明治三十八年二月十一日

紀元節奉祝征露一周年記念を兼ね **本校より中山寺間約一里半**の長距離團體競走を始めて行ふ。

大正九年十月三十日

教育勅語御發布三十周年記念として長距離競走を行ふ。走

路三種を選び、三里の走者を眞先に一里を最後として各五分間の間隔をきて出發せしむ。

大正十一年五月二十七日

海軍記念日をとし **武庫川畔より本校まで約三哩**、學年毎に各五分間の間隔をおきて出發。

大正拾二年十一月二十日

左の **走路（約四哩）**を學年毎に各五分間の間隔をおきて出發せしむ。

- 本校西門——大鹿——昆陽池——昆陽村——千僧——大鹿——金岡——本校正門——校庭

大正十四年五月拾八日

左記走路により **第一回全校一萬米競走**を行ひ、同時に出發せしめて團體並に個人の成績を嚴重に調査表彰せり。

- 本校西門——大鹿——荒牧——新田中野——昆陽——伊丹小學校——本校正門

爾來同一の方法によつて毎年實施せしが体育デーの規定せらるるにより十一月二日若くは三日之を舉行する事とな

る尙十哩競走實施計畫に苦心せるも交通網の複雑なる當地方に於てはその走路選定甚だ困難にして未だ實施の域に至らざるは遺憾とする所なり。

第七回一萬米競走(昭和六年十一月二日) 成績左の如し。

(イ)團體成績

年級	學年	平均	各組	各組	各組	各組	在籍數
V	四	57.53	一組 四六、四	一、三〇〇	二八	九	三七
	二組	六五、七	一、九四〇	三〇	七	三七	
	三組	六一、七	一、四二〇	二三	一四	三七	
IV	二	66.70	一組 七一、〇	二、二〇〇	三一	九	四〇
	二組	六二、五	二、〇〇〇	三二	八	四〇	
	三組	六六、八	二、〇七〇	三一	七	三八	
III	三	65.30	一組 六六、二	二、四五〇	三七	五	四二
	二組	六五、三	二、四八〇	三八	五	四三	
	三組	六四、五	二、五八〇	四〇	四	四四	

計	I			II		
	一組	二組	三組	一組	二組	三組
54.16	五六、四	五二、〇	五四、一	六六、七	六五、五	六九、一
67.05	二、六五〇	二、四四五	二、六五〇	二、二〇〇	二、五五〇	二、六二五
三四三二〇二	四七	四七	四九	三三	三九	三八
六四五	四	六	四	七	五	八
	五	五	五	四	四	四

學級別第一、二、三等  
 第一等 第四學年一組  
 第二等 第四學年三組  
 第三等 第二學年三組

(ロ)個人成績

到着順	タイム	學年	年組	姓名
一、	三十九分	五年	二組	岩佐 圭祐
二、	四十分三十二秒	五年	二組	株元 敏夫
三、	四十分五十秒	三年	三組	田中 巖
四、	四十一分	二年	三組	藤田 常男

五、	四十一分三十秒	四年	三組	橋本 治
六、	四十一分三十五秒	三年	二組	瀧内 武治
七、	四十一分三十九秒	五年	三組	中林 登
八、	四十一分四十秒	四年	一組	岡田 真雄
九、	四十一分五十秒	三年	一組	吉田 信一
十、	四十三分五秒	四年	三組	武田 昇

(備考 最後到着 八十六分)

(ハ)競技部の獨立並に實況

當部の獨立は日尙淺きも創立以來毎年實施せられたる運動大會によつて優秀なる選手を輩出し、大正八年白國アントワープに於て堂々世界の猛者と覇を争ひたる加賀一郎氏も亦本校運動部の生める選手なり。

大正九年六月神戸高商主催陸上競技大會に刺戟せられ、競技練習員を募集して猛練習を始めし日ならずして解消せらるゝに至る。

然れども時代の状況は益々競技部の設備を促し茲に大正十年徒歩部獎勵委員の任命あり、次いで翌十一年四月愈々徒歩部が設置せられて五種競技其の他の世話掛を兼ね。徒歩部は遠足を主とするものにして名實共に獨立の實を挙げたるは大正十三年四月なり。

多年の宿望達せられ、茲に輝かしき未來への前途に當り憾みても餘ある一大痛恨事勃發す。當時第三學年生某君競技練習用の槍に當り可惜有爲の一生を無残にも失ふ。之によりて保護者の強要を受け遂に投擲競技は封じらる一周二百米を取り得ざるトラック、野球部の憂然たる球雨の下に涙ぐまじき練習を積める部員は更に投擲の練習を制止せられて今は只數種の演技に努力するに止むなく競技大會に参加するも優勝の理想は夢想だも許されざる現況にあり。

兵庫縣聯盟競技大會に参加せる成績左の如し。

年度	各校成績順位	得点
大正十四年度		一点
十五年度		一点
昭和 二年度	八	四点
昭和 四年度		三点
昭和 五年度	八	一点五
昭和 六年度		一二点

都島工業學校主催近府縣中學校八百米リレー競技に参加し昭和二、三兩年に亘り優勝旗を獲得せり。

競技部費決算 (昭和六年度)  
支出之部

備品並消耗品費	三四、八〇
選手派遣費	六九、五〇
外來選手接待費	一一、〇〇
選手運動用具補助費	三九、四〇
遠足補助費	一五、〇〇
卒業生送別會補助費	八、〇〇
雜費	二二、三〇
合計	二〇〇、〇〇

文庫部

「皇太子殿下御成婚記念文庫」と云ふ尊いめでたい名を以て我文庫の生れたのは、今より九年前大正十三年一月二十六日である。

其創設に至る経過の概要を記せば、同年一月十四日、此

盛典を記念すべき事業の計畫に就て本校職員會が開かれ、協議の結果、校友會の事業として記念文庫を開設し、寄宿舎元食堂を閱覽室に充つることとなり、當時の校長事務取扱大澤教諭は、詮衡委員として、大澤、晴山、横山、松澤、杉山、小松、宮山、樋口、古東、鹽見の十教諭を指命した次で十九日校長室に於ける詮衡委員會で左の創設案が作製せられた。

一、創設費 金五百圓

一、現在生徒各自より金五拾錢宛贈出

一、職員は俸給月額百分の一贈出

一、前二項の合計高き五百圓の差額は校友會の積立金より支出す

一、職員生徒より記念として圖書を寄贈する事

一、二十六日の拜賀式までに寄贈せられたる圖書は、之を式場に陳列して文庫の前途を祝福すること

右七項の原案に對して、職員會及び校友會役員會に於て同意を求めて其の實行方法を定むることとし、大澤教諭より文庫創設確定後の役員として、松澤、宮山、樋口、志貴、塩見五教諭を指名し、閱覽室の設備設計圖書保管及閱覽室監督には松澤教諭に當ることとなる。

一月二十一日の職員會議は、前記詮衡委員會の原案に全會一致賛成し、更に同日の校友會役員會に於て、大澤副會長より記念事業に關する前記指案につき諮問し、滿場異議なく可決確定、依つて翌二十二日朝禮の後副會長より前日可決確定せる記念事業及方法を一般生徒に發表した。

かくて創設の準備全く成り、一月二十六日、

御成婚拜賀式の當日、職員生徒より寄贈書物約三百冊、之に校友會の圖書六十餘冊を加へて式場なる講堂に陳列し式後之を本校圖書室に移藏して、茲に校友會の新しい一部として、目出度き記念文庫の誕生を見たのである。

尙創設當時の生徒側委員として、五年四年より互選せられた者は左の通りであつた。

- 五年 高寺 八郎、久野 善夫、上村 清次
- 三崎 悦治、美濃 孝三、三枝 壽雄
- 四年 松田 芳郎、瀧内晃太郎、喜谷 藤作
- 甲川 巖、山島 勳、人見 立夫

右先生側の五名、生徒側の十二名の役員は、文庫の設備圖書の整理購入閱覽方法等に就いて着々作業を進めたが、學年末多忙の爲め未だ開庫の運びに至らず、三月九日第十八回卒業式當日に、閱覽室を開いて來賓及び一般生徒の縦

覽に供したに止まり、實際の開庫は新學年の四月十日となつた。

大正十三年四月十日は、記念文庫が閱覽を開始した創設に亞ぐ記念すべき日である。當時の役員は次の如くであつた。

部長 松澤教諭

參典 片山教諭(五月に袴田教諭と交代)

原田教諭

生徒委員

- 五年 松田 芳郎、青山 四郎、中島 信、田中惣三郎、前田金次郎、瀧内晃太郎、
- 四年 廣田八十松、飛木田貞治、武田 胤雄、喜田亮三郎、近藤 正喜、中村 啓藏、

これら役員諸氏によりて、書棚閱覽臺、原簿等大体の設備も整ひ、閱覽時刻、心得等も定められて、小規模とは云へ文庫の形式を立派に備へたわけで、我等は以上の諸氏に對し、殊に文庫の創設より開庫に至るまで、主として其の衝に當られた松澤教諭に對し、永く敬意と感謝の念を持つべきである。因に大正十三年度末の書籍總数は八百六十となつてゐる。



爾來八星霜、一旦基礎が成れば文庫の仕事は比較的容易であると共に、亦平凡である事は止むを得ない。他部の如く外部に對し花々しい活躍、特記すべき事績もないが、幾千と重なる閱覽票は、生徒の内面的發展を幾分なりとも培ひたる事を信じつゝ、緩慢ながらも着實に繼續して今日に及んだのである。

部長としては、松澤教諭について袴田、鈴木、川合諸教諭を経て現在の石原教諭が其任に當つてゐる、鈴木部長は大正十五年八月郷里に於て不慮の災難に此世を去られ、文庫にまゐりて思ひ出多き事となつてゐる。松澤教諭は現に大阪府の浪速中學に健在せられて居り、袴田教諭は文庫以外に園藝部創設其他に顯著なる功績をあげられ、今は日本の郵便局長として活動せられて居る。

昭和二年度 阿部校長の時代に於て、校友會費の増額があり爲めに文庫の經費に一大進展を來し、昭和四年度には書棚大小二基を増し、修養方面に、運動方面に、受験方面に又娛樂方面に着々充實を計つて、昭和六年度末現在の冊数は約千五百となつてゐる、千五百の藏書は勿論まだ貧弱である。しかし書庫の効果は必ずしも其冊數に依らず、其利用の方法に依るこゝ大なるは云ふまでもない。

我等文庫の役員は、一は文庫設立の趣旨にかんがへ、一は生徒の自治心に訴へて、益々内容の整頓と閱覽者の便宜を計るつもりであるから、校の内外を問はず、一般有志の御後援と御鞭撻とを切望する次第である。

付記

昭和參年度、阿部校長の時代に、戊辰會が成立し、其會費より年々若干の經費が出て、特に學術研究に關する書籍が購入せられて現在約三百冊の冊數に上つてゐる。これは校友會の文庫とは別に、戊辰會の圖書として藏せられてゐる。

## 園 藝 部

嚴冬早や過ぎ去りて、將に昭和七年の我が伊丹中學校創立三十周年の祝典年に當る目出度き新春を迎へんとする今日、我園藝部の現状や如何に、並に過去四年前の我が部創立以來今日に至るまでの概略、及び將來の希望方針を述べん。

我が校を去られし、部長及び我が部の先輩諸兄の多年憧

憬、希望であつた温室は前部長袴田先生(昭和六年を以て我が校を去らる)及び參與武岡先生(現部長)並に卒業生諸兄の深甚なる御盡力によつて、立派に建設されてより爾來益々隆盛に赴き、「伊中の園藝部」と云へば、縣下中等學校に其の名を高からしめてゐる状態である。

某先生が或る時此の様な事を云つて居られた。

此の學校より余程隔たつた縣下の中學校に行つた時、第一番に君の學校の園藝部はなか／＼立派なさうだな……此の話を耳にする時、我部獨立後經驗日尙淺き園藝部々員の胸はさんなであらうか、恐らく感謝と感激に打たれざるを得ぬだらう。

「温室」云ふものを最初經營するには多大の費用と多くの勞力とを要する。室内に植物を充満させる爲或は寄贈により、或は購入によつて爲し、觀賞に研究方面に適應させるべく、草花を植る營む事は一通りの苦勞ではなかつた。冬が訪れると、煉炭を入れねばならぬ。日に三個乃至四個の煉炭を入れるのは、經費上から見ても大したものである。それ故去年の末より煉炭製造に必要な原料を購入し部員又は作業科の手によつて作成する事となつた。之れも後學の爲に喜び勇んでなしたものの、機械の不充分もあるが、

考へられる如く容易になし得るものでなかつた。或は休暇を利用し或は放課後の隙間を利用して、重い槌を振り、手足も炭で眞黒くなりながら、園藝部の爲めと努力に熱誠をこめて、次第に増えて行く數を楽しみながら一心に煉炭製造を行つた。

之等をよく乾燥させ、毎日々々當番は放課後直ちに小使室に重い煉炭を運び、点火させて、十分なる時機にポイラに入れ消失の恐れなきやう十二分に注意し後温室上の覆を下して、陽は西山に入り、四方夕闇の薄暗き幕に包まれ初める頃、急ぎ歸途に着くのであつた。若し点火不十分にして歸るならば、火は消失してしまつて、嚴寒の中に室内の可憐な草花も堪へ兼ねて、涙をたれて悲哀を乞ふ物の如き有様となつてしまふのであつた。此の様な時にはきつと部長武岡先生が責任を大いに感じられて如何に深夜であらうとも如何に寒夜であらうとも厭はれず、再び煉炭に点火せられて居た。我等が此のことを耳にする時、感謝の念が涌き出すと共に「すまない」と思ふ感じで一杯であつた。

温室建設に要する經費及び草花肥料、原料其の他の必要品に多大の經費がかかり、唯研究用觀賞用としては到底我が部の維持發展は保持し難くなつた。



に参加し、その當日に受けたる喇叭鼓隊部の影響は實に多大なものにして以後の進歩發展の最大原因はこゝにありと言ふら過言ではない。

十月十八日 當日催されたる本校運動會に左の如く活躍す。

- 午前 1、朝禮……………海行かば  
 2、國旗掲揚式……………君が代  
 3、校旗出場……………足曳  
 4、本校生徒選手入場式…陸軍マーチ及足曳  
 5、小學校尋高選手優勝旗返還式……………陸軍マーチ及足曳
- 晝休 演奏……………陸軍マーチ。君が代。國の鎮め。實剛健。海行かば。足曳。分列式。
- 午後 1、教練……………分列式  
 2、優勝旗授與式……………陸軍マーチ、及足曳。

- 樂長……………岡村(5)  
 大太鼓……………井筏(5)  
 小太鼓……………村上(5)  
 //……………橋本(4)  
 //……………福島(4)  
 //……………平石(4)  
 //……………近藤(3)  
 //……………大隅(3)  
 //……………三上(2)  
 //……………藤谷(2)  
 小ラツバ(1) 多田(5)  
 // (1) 矢野(3)  
 // (1) 西田(3)  
 // (1) 青山(3)  
 // (2) 安本(3)  
 // (2) 村上(1)  
 // (2) 株元(1)  
 中ラツバ(1) 塚尾(5)  
 // (1) 油井(3)  
 // (1) 小森(2)  
 // (2) 橋本(3)  
 // (2) 千野(3)  
 // (2) 加藤(3)  
 大ラツバ……………梶田(4)  
 //……………大野(3)

3、國旗降納……………君が代  
 4、校旗退場……………足曳

本年度の運動會は例年とは異り喇叭鼓隊の演奏が加はつた故觀衆を興味づけた。

十一月十三日 小柳兵庫縣知事閣下當校御視察に御出になつたので「海行かば」を奏して御迎へす。

十一月十五日 戊辰會。三時間授業後喇叭鼓隊部は校庭に於て其の練習振りを各父兄に御覽に入れた。午後雨中にも拘はらず分列式を奏した。

十二月に舉行される教練查閱迄には大編成にせんとし此の頃より募集にかゝり平石(4)油井(3)小松(2)三上(2)寺内(2)城江(2)南堂(2)藤谷(2)村上(1)株元(1)の諸君が入部した。

大編成のメンバー。

十二月 教練查閱舉行され「海行かば」「分列式」を演奏す。當日は查閱官殿より我喇叭鼓隊部の進歩の速きことをおほめに預かる。

十二月 全校南北兩軍に分れて野外演習。喇叭鼓隊は岡村君、村上君の指揮による第一、第二班を組織し南北各軍に附屬す。

昭和七年一月一日 「海行かば」「君が代」  
 第三學期

一月 全校の行軍前回と同様第一、第二班を組織す。  
 一月三十一日 記念すべき喇叭鼓隊部の第一回送別會を開く。今年度は新しい學校規則により質素なる茶話會

- 樂長……………梶田(4)  
 大太鼓……………小松(3)  
 小太鼓……………橋本(4)  
 //……………福島(4)  
 //……………平石(4)  
 //……………近藤(3)  
 //……………大隅(3)  
 //……………三上(2)  
 //……………藤谷(2)  
 //……………萩野(2)  
 小ラツバ(1) 矢野(3)  
 // (1) 西田(3)  
 // (1) 安本(3)  
 // (1) 青山(3)  
 // (2) 升井(3)  
 // (2) 主計(5)  
 // (2) 城江(2)  
 // (2) 株元(1)  
 中ラツバ(1) 油井(3)  
 // (1) 寺内(2)  
 // (1) 小森(1)  
 // (2) 橋本(3)  
 // (2) 千野(3)  
 // (2) 加藤(3)  
 大ラツバ……………大野(3)  
 //……………南堂(2)

を開く。安達、武岡兩先生の御出席の榮を得たが金先生は家事の都合により御缺席なされた。卒業生塚尾君も缺席なされたのは甚だ残念であつた。物質的には例年より粗末であつたが卒業生諸兄を始めとし一同は精神的には愉快なる數時間を過した。

次いで新樂長及び新樂長補左の如くに決定。

樂長……………梶田(4)  
 樂長補……………橋本(4)

二月 白根兵庫縣知事閣下當校に御出になり、「海行かば」を演奏。

四年生以下よりなる大編成の新メンバー

二月 授業中橋本君(4)喇叭鼓隊を引率し伊丹中學校を代表して伊丹町出征軍人を伊丹驛に送る。

二月 日曜日なれども再び出征軍人を伊丹驛に送る。

三月二十三日 尼ヶ崎蝶印レコード製作所にてレコード吹込をなす。

(A)陸軍マーチ。(B)陸軍マーチ。

(A)國の鎮め。實實剛健。足曳。吹きなす笛。海行かば。

(B)分列式。

當日は卒業生一同揃つて戴き、最後の演奏をして貰ふ豫定であつたが上級學校の受験或は家事の都合のため唯村上君一人の出席を見たのみで我々後に残る者にとつては甚だ遺憾なことであつた。

尙五月には本校創立參拾周年記念式が舉行される故我が部は大活躍を期待し此の春休みを利用して「建國行進曲」「御大禮奉祝行進曲」の二曲目を習はんとて部員擧つて猛練習を行ふ。

註「分列式」「海行かば」「足曳」「吹きなす笛」は金先生の御作曲による。以上

## 給品部

本部は昭和五年四月縣教育會の獎勵によつて開設され、其の目的は生徒、父兄の負擔を幾分なりとも軽減せんとするにあり。爾來三ヶ年生徒の學習上必要な文房具、運動具、制帽、雜糞等を直接製造工場或は問屋より仕入れ最廉の値段で供給し、以て今日まで相當の成績を挙げ來れり。而して昭和五年度末及び六年度末に於て其の利益を校友會に寄附せり。

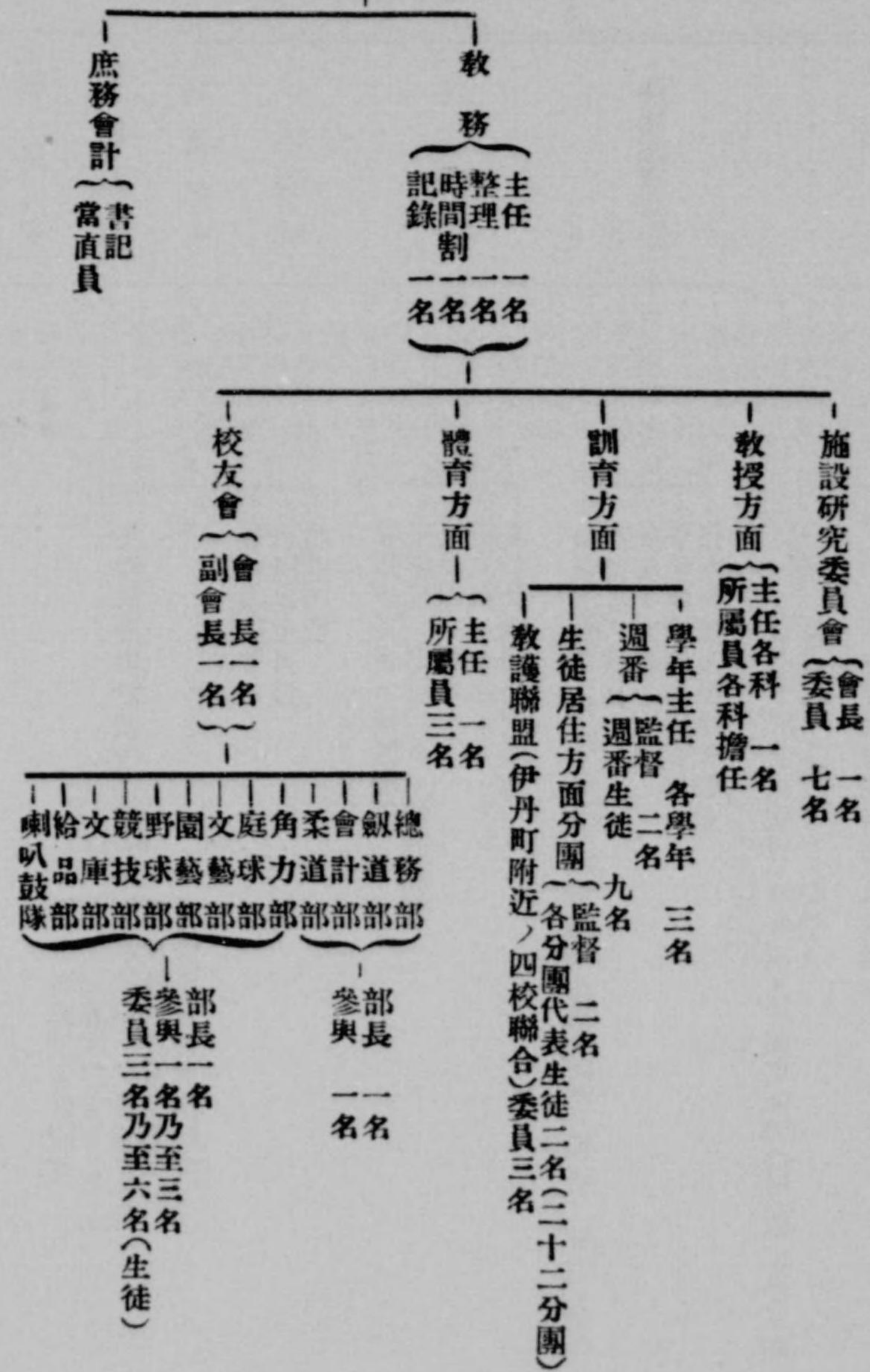


## 本校教育の現況

### 本校教育の要旨

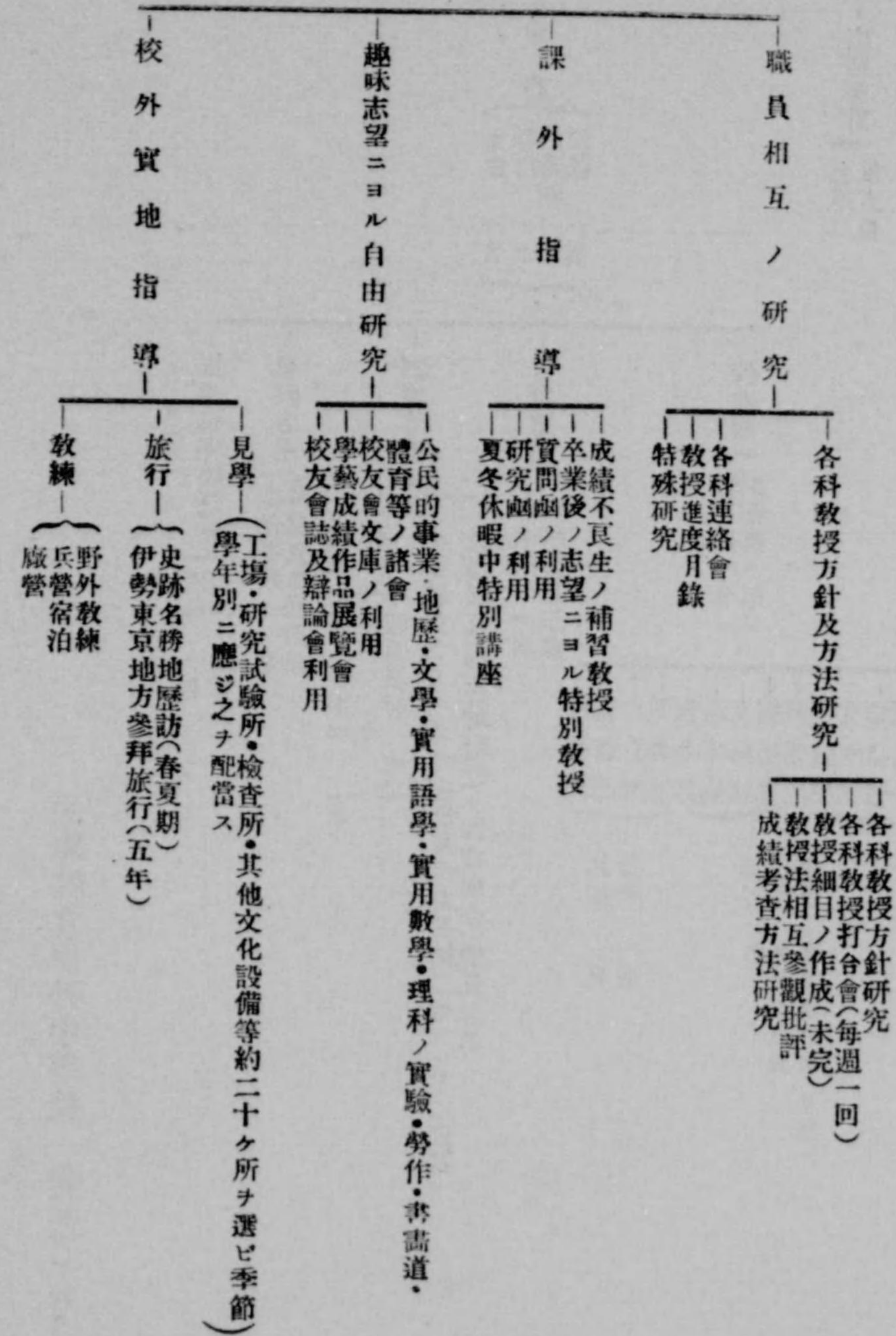
聖旨を奉體し國家の示せる方針に基づきて教育の體系を立て先づ以て生徒日常生活の綱領として誠實勤勉剛健の三徳を掲げて之が徹底に努め日本國民たるの精神と實力とを確保せしめ以て帝國の中堅となるべき強く正しき人物の養成を期す。

制職ノ上設施育教



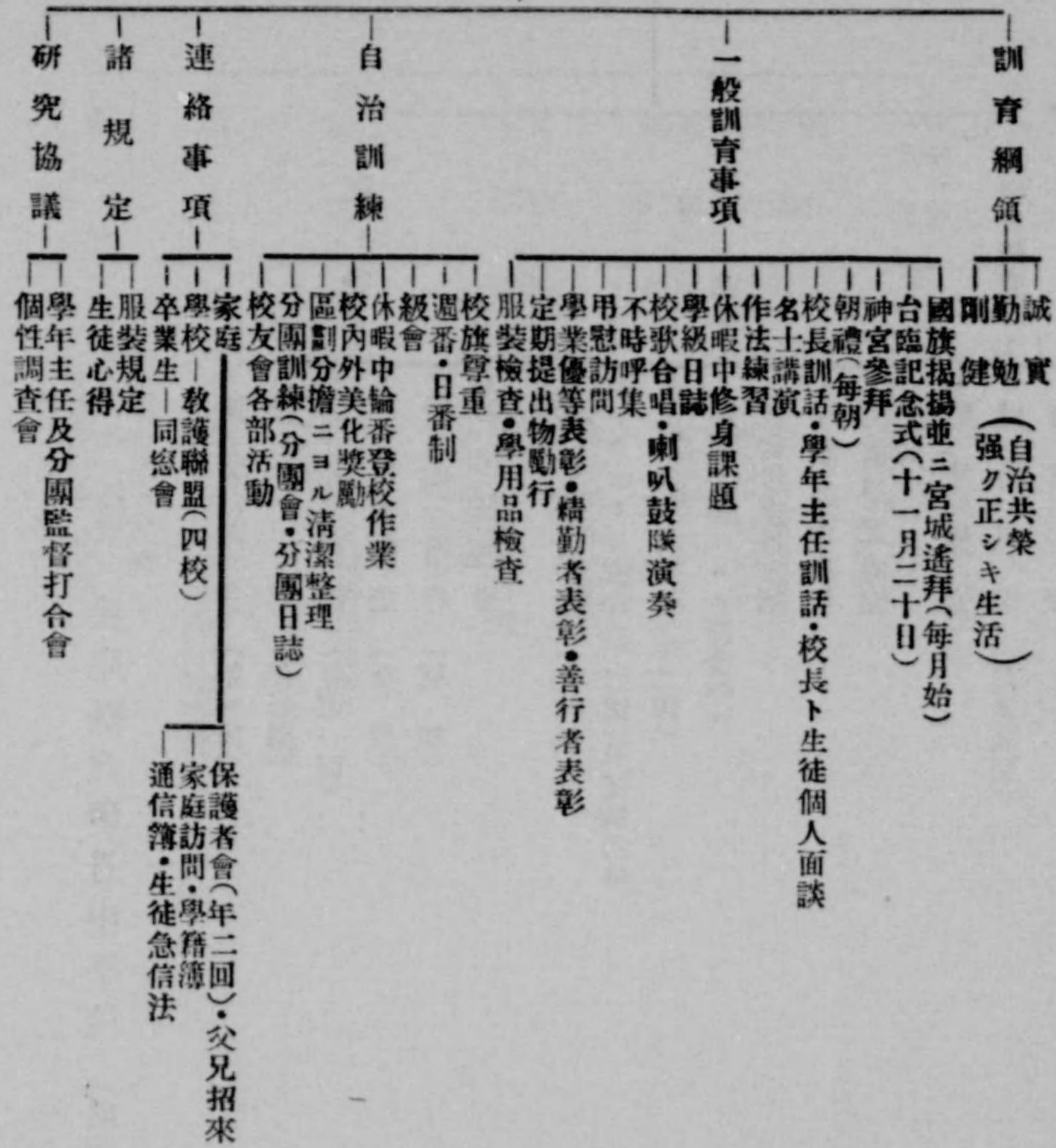
兵庫縣立伊丹中學校 (昭和六年四月現在)

# 設施面方授教



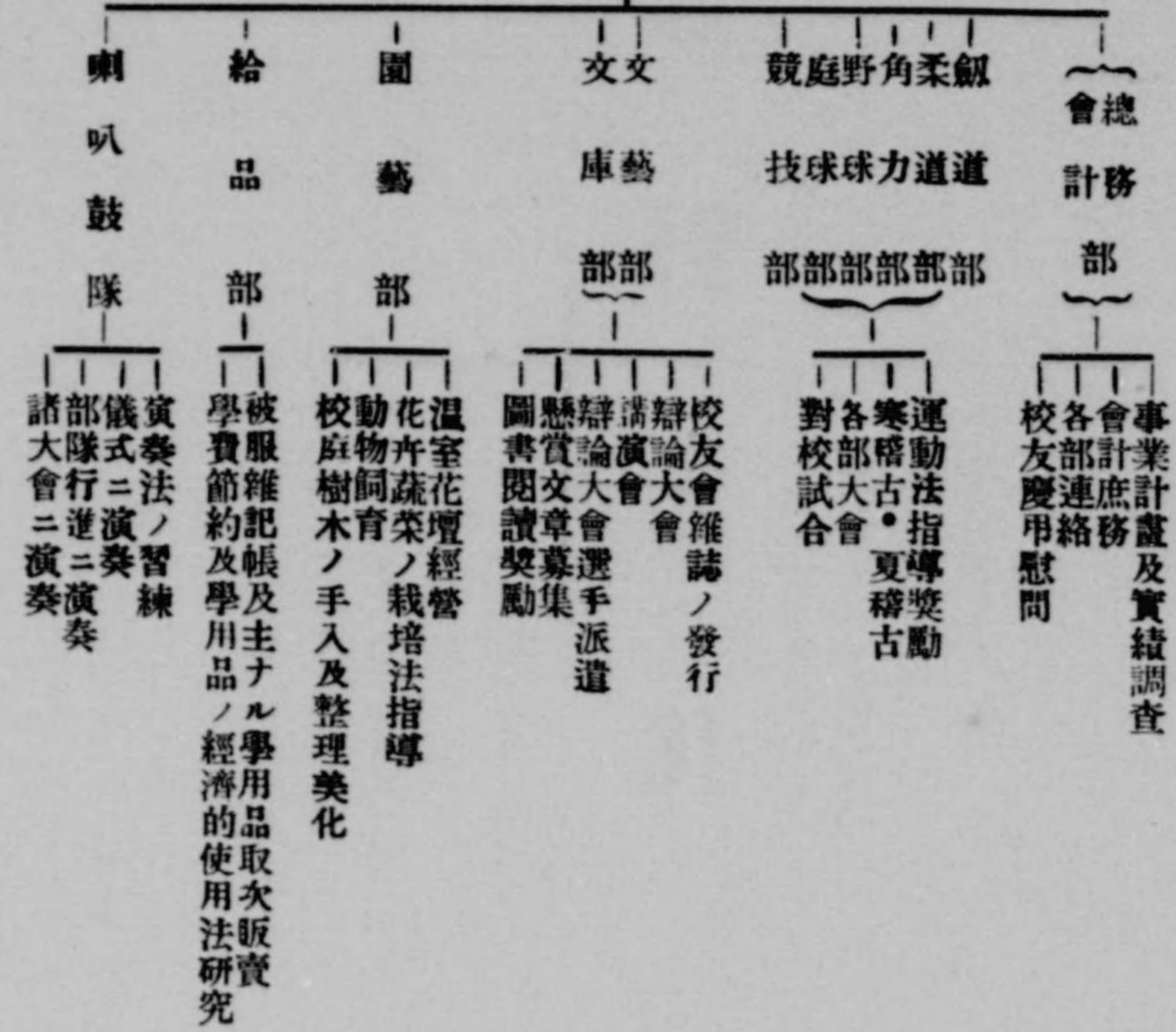
兵庫縣立伊丹中學校 (昭和六年四月現在)

# 設施面方育訓



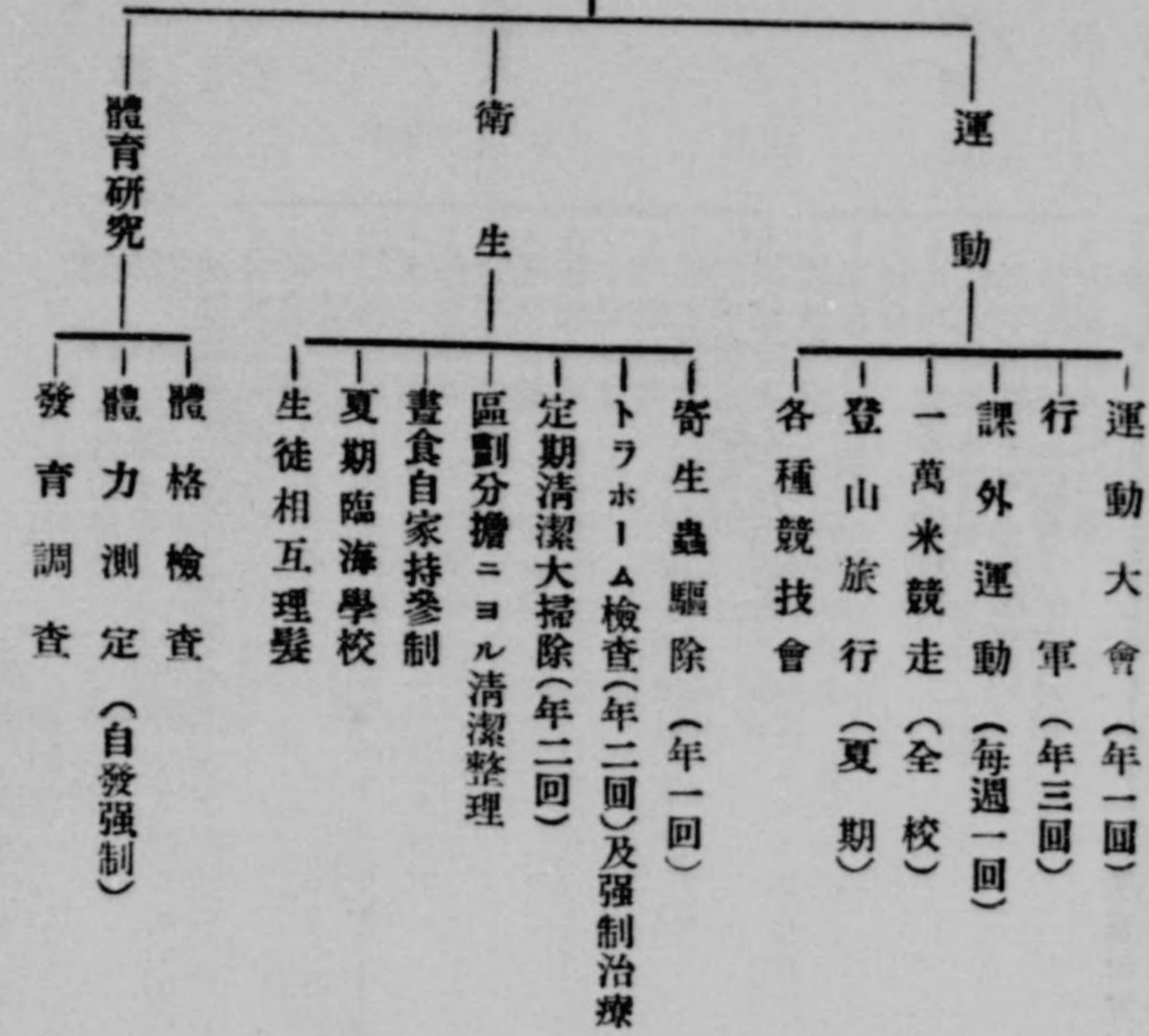
兵庫縣立伊丹中學校 (昭和六年四月現在)

校友會設施



兵庫縣立伊丹中學校 (昭和六年四月現在)

體育方面設施



兵庫縣立伊丹中學校 (昭和六年四月現在)

教  
授  
方  
針



## 修身科

### 一、教授の方針

- 1 教育勅語、戊申詔書、國民精神作興に關する詔書の御趣旨に基き國民道德に對する明確なる知識を授け信念を養ひ之が實踐躬行に努めしむ。
- 2 鞏固なる意志を養ひ生徒各自の内生命に存する徳性及び國家意識を自覺せしめ以て如何なる時代思想に對するも其の批判取捨を誤らざる健全有爲なる國民たり社會人たらしむ。

### 二、教授の重點

- 1 誠實、勤勉、剛健の三綱領を以て訓育の目標とし其の實踐に努めしむ。
- 2 善なりと信ずる行爲及び與へられたる任務は必ず實行するの意志及び信念の養成に努めしむる爲各施設と聯絡す。
- 3 教授の徹底を期する爲め生徒各自の個別指導を行ふ。
- 4 思想善導には最も意を用ひ各科受持教師、學級主任、父兄等と聯絡し生徒各自の身體家庭其の他の環境調査等をなす。

### 三、其の他

- 1 教材は主として教科書によるも地方的材料新聞雜誌にあらはれたる時事問題及び社會問題其の他の偶發事項中適當

なるものを附加す。

### 2 個別指導として左の事項を行ふ。

- イ、毎日生徒數人づつと座談會を行ふ。
- ロ、生徒各自に日記、修養録等を記せしめ時に研究問題等を課す。

## 公民科

### 一、教授の方針

- 1 功利的、階級的思想、及個人主義的思想より社會主義的思想へ展開する傾向を絶対に排して、醇厚中正の大道を歩ましめんとす。
- 2 我が國の國家國體を本とし、日本精神の貫徹に留意す。
- 3 生徒の日常生活の經驗より、概念を把握せしめ、次に學問的に解説を施して之を徹底せしめ、更に修身及實際生活と結び付けて、理論と實際との連絡統一を計らんす。

### 二、教授の重點

- 1 煩瑣なる條文其の他の事項を雜多に教授し之を生徒の記憶に訴ふるが如きを避け、各題目の精神要領を体得せしむ
- 2 自學自習を中心とし、適宜に問題を與へ、生徒自身の解決によつて知識の徹底を期す。
- 3 校内、校外に於ける日常普通の動作は總て本科教授の對象たるにより、その公民的訓練によつて本科教授の目的達成に努力す。

## 國語漢文科

### 一、教授の方針

本科に於ては其の分科たる講讀、作文、文法及び習字の間に密接なる連絡を計り、之に統一せる體系を與へ、「讀む力」と共に「發表する力」の増進に努めしむ。

### 二、教授の重點

講讀は聲音を内聽して教材の意味を探求し、文意の直觀、全意の會得より部分的考察に進み、構想の理解より批評鑑賞に入り、文の内容精神を領得して自己を擴張し、自己内生命の創造を期し、機械的、暗記的解釋を避けて潑刺たる言語の生命を捉へしむ。

作文は、物をよく見又は心を熟視せしむるを主眼とし、自由選題と課題とを適宜混用す。

文法は、前二者の間に緊密なる連絡を見出し、國語科と云ふ統一したる體系を意識せしめ、實用的語句、文章を教材として歸納的に、正確なる語法に練熟せしむ。

習字は、正書、美書、速書を主眼とし、盲目的に模寫するなく、自由的確に技能を發揮し、各自の個性を尊重して自由を伸張せしむ。但し自己流の草書、略字等に就いては之が矯正を怠らず、尙時間に餘裕ある場合はペン習字をも課せんとす。

### 三、其の他

學校及び家庭に於ける研究の要領を示し、生徒をして研究發表、討論、作品の鑑賞批評を行はしめ、趣味、思想の健全

なる向上發達を期す。

生徒各自に正誤帳を作らしめ、誤字、假名遣の誤謬について訂正せられたるものを摘録し、作文の場合にその習癖的誤用を矯正せしむ。

文藝ノートを備へ、國語教材中暗誦するに足る模範的詩歌文章を抄録せしむ。  
成績品展覽會を毎年少くとも一回開催す。

## 英語科

### 一、教授の方針

(1) 現代普通に行はるゝ英語に就き、之が了解及發表の兩方面に於ける能力を與へ、以て知識の増進に資す。

(2) 彼此の風習歴史等を比較對照し、我國粹に關する認識を一層明確ならしむることに依りて、健全なる日本國民たるべき徳性の涵養に努む。

### 二、教授の重點

(1) 教材の選擇及分量に注意し、教授の方法を立案し、教授事項の徹底を期す。

(2) 學習の基礎を確立する爲め、初年級の教授者は特に熱心と根氣とを以て之に當らざる可らず。

(3) 實力の養成に努むると共に、生徒の興味を喚起し、漸次自學自習及自發的研究に誘導す。

(4) 教科書に膠着するの弊風を矯め、生きたる言語を教授することを忘る可らず。

(5) 常に各分科の聯絡と之が統一に留意す。

## 歴史科

### 一、教授の方針

- 1 建國の體制、皇統の無窮歷代天皇の盛業を體認せしめ、民族の大理想、國体の精華を明かにし、忠良賢哲の事蹟を追慕させ國民志操の涵養につまむること。
- 2 我國文化の由來を探究せしめ、積成の偉大さを感じせしめ、國民文化の愛護尊重につとめしむ。
- 3 對外關係の研究により我が民族性の特色を自覺せしめ堅實なる國民精神の培養につまむること。
- 4 國民の社會生活を明かにし、其の發達を理解せしめ現代社會生活に處する見解を體得せしむ。
- 5 彼我の國體及び民情の異同を明かにし、益々國民志操を陶冶せしむ。

### 二、教授の重點

- 1 内容的方面に於ては文化史的方面を重要視し、外國文化との關係を明かにし、國際人としての志操を養成せしむ。
- 2 歴史的理法を説き、歴史的考察力を養成せしむ。

### 三、其の他

- 1 説話中心の教授により生徒の感情を誘起せしむ。
- 2 史上人物の言行、心性に對する批判、史實の内面的考察、國民精神、時代精神等に對する自由考察により情操の陶冶につまむ。

## 地理科

### 一、教授の方針

- 1 我が國勢に對する理解により堅實なる國民的志操を養成し、愛國心の涵養に力め、以て國運進展の方策を考究せしむること。
- 2 世界に於ける我が帝國の地位並びに國民として當に爲すべき使命の自覺、國家思想の向上發展を目標とし國力の充實と民族の統一を圖るべきことを自覺せしむ。
- 3 世界列國の現状と其の由來せる所を的確に把握せしめ、國際關係、經濟的相互扶助の關係を明にし、國際的精神を培養すること。
- 4 地理的理法を説き地理的事實を體得せしめ、地理的識見を高めること。

### 二、教授の重點

- 1 内容的方面に於ては世界的識見の涵養と國際精神の教養に努む。
- 2 學習指導方面に於ては環境を整理し、生徒の求知慾を伸展せしむ。即ち地理研究の意義の理解と之に伴ふ興味を喚起せしむ。

### 三、其の他

- 1 畧圖中心の教授により、生徒をして描圖になれしむ。
- 2 統計資料の蒐集、圖表の作製等になれしむ。

- 3 新聞切抜等により地理的資料の蒐集につとめしむ。
- 4 模型圖の作製、標本、エハガキ等の蒐集につとめしむ。

## 數 學 科

### 一、教授の方針

- 1 中等數學は之れを分科せず綜合せる一科を理想とす、然れども普遍妥當なる綜合の規準未だ確立せず單に分科を斷片的に混合したるが如きものを以て綜合組織となすは有害無益なり、故に暫らく分科を適當と認め唯之れを教授するに際し融合連絡を不斷に努めて綜合の實を擧げんとす。
- 2 教材は生徒心意の發達に順應して配列しその取扱は心理的原則に據る。
- 3 形式的理論の研究及び演繹推理の練習に偏することなく實用的知識を與へて生活上の應用を重んず、特に函數概念の養成につとむ。
- 4 觀察實驗實測を重んじ事實問題を中心とし之れを數學的に處理して一般的结果を探索せしむる樣歸納推理の訓練をなす。
- 5 段落毎に要項摘記を命じ生徒の知識に統一を與ふること。
- 6 教授の効果を判定し教師反省の資とし生徒の缺點を救済するため常に簡單なる考查と段落毎の總括的考查を行ふ。

### 二、教授の重點

#### A 算術及代數

- 1 算術は數の概念及び計算に關する法則を明確にし四則應用に於て適宜文字を使用し代數導入の緒となす。求積は幾何圖形に於て課す。
- 2 代數は初めは少なく授け多く練習せしむ、而して全體は方程式中心となし、形式算の如きは方程式の解方と聯關せしめて授く。
- 3 函數及びグラフを重んず。

#### B 幾何及び三角法

- 1 幾何は論理の形式を修練すると共に空間の觀察力を養ひ實用的知識を與ふ。
- 2 幾何圖形に於ては圖形の觀察實測模型の作製取扱等により圖形に親ましめその性質を掴ましむると同時に簡單なる證明は之れを試みさせて理論幾何の圓滑なる連續を圖る。
- 3 理論幾何も初めは實驗的にし成るべく理論普遍化の必要を感知せしめて論證を加へる。
- 4 代數公式と幾何定理又は作圖題解法との相互對關係を考察する機會を多くす。
- 5 三角法は三角形の解法及びその應用を重んじ又記憶を要する公式を成るべく輕減す。

### 三、其の他

- 1 教師生徒一体となり共同研究の態度。
- 2 學習は勞作的。
- 3 發表は正確敏速。
- 4 成績品は交換批評。

5 一般的誤謬の蒐集及び發表。

## 理科

### 一、教授の方針

- 1 自然界に於ける自然物及自然現象を観察實驗することにより正しき宇宙觀を養成す。
- 2 理科的知能を體得せしめ以て事物の眞理眞相に觸れしめ創造發見の能力を得しむ。
- 3 日常生活に必要なる實際的理科知識を附與することに努む。
- 4 理科に關する自主獨立の研究態度を養成す。

### 二、教授の重點

- 1 實驗觀察を基調として學習を伸展擴充する事。
- 2 科學的精神の涵養に努むる事。
- 3 自然物の利用厚生、保健衛生社會的實際的知識の涵養に努むる事。
- 4 日常生活の事實を解決せんとする立場にありて探究し其中に存在する理法を發見せしむる事。
- 5 理科教授を作業化し以て其知識を明確ならしめ實行能力を得せしむる事。
- 6 學校に於ける理科を生徒日常生活の中に伸展せしめる事。

### 三、其の他

- 1 生徒立案の學習計劃を尊重し活用する事。

- 2 實驗觀察に於ては生徒の自由を尙び周到綿密に行はしむ。
- 3 器具、器械、藥品の整理、火氣、戸締等後始末を嚴にし良習慣を涵養する事。
- 4 教材及指導の方法等可能範圍に於て緊密なる連絡を取り殊に作業科との連絡關係を重視する。
- 5 學習過程及後の衛生に一層の注意を拂ふ。

## 圖畫科

### 一、教授の方針

#### 1 鑑賞方面

##### イ 自然觀照

生徒の生活内に於ける人物、風景、靜物、建築等總て自然界の外象は美の對象たり得る事を感じしめ、觀察研究せしめて美術心を養はしむ。

##### ロ 藝術鑑賞

機會を選びて繪畫、彫刻、工藝その他音樂、演劇等の適當なる作品に接せしめ、それ等作品より受くる感銘に依つて美術に對する教養を積ましむ。

ハ 優秀なる生徒の成績品は之を校内に陳列して批評眼を高めしむ。

ニ 鑑賞材料の選擇、排列、蒐集に努むるこゝ。

#### 2 創作方面

- イ 各自の有する藝術的才能を認識發見し之を指導誘掖する以上に深く干渉せず個性を伸ばさしむる爲の時間の許す限り個人指導をなす。
  - ロ 教本により技術能力の練磨を爲さしめ鑑賞指導に於て會得したる感銘を自由に造型表現せしむ。
  - ハ 産業美術に對する常識を養ひ之が創作に從來以上の力を注ぐこと。
  - ニ 用器畫に於ては數學科、作業科との連絡を考慮し専ら形象文明に關する確實なる建設能力の陶冶に努む。
- 二、教授の重點
- 1 常に生徒の生活に即せる教材を選ぶこと。
  - 2 美術の生産的方面の陶冶に力を注ぎ、本科をして教室のみの作業に止めざること。
  - 3 高學年に於ては用器畫に就て緻密、正確、努力等の徳操を養ふと同時に、工業工藝の重要な基礎的訓練をなすこと。
- 三、其の他
- 1 特別教室及準備室を是非とも設備する事。
  - 2 美術史上著名なる作品の複製品等の如き鑑賞材料、標本等を設備する事。

## 體操教練科

### 一、教授の方針

體操教練の目的に鑑み本校訓育方針に従ひ實踐倫理を以て任じ心身の鍛練徳性の涵養に努む。

教授に際しては生徒をして良く體操教練の目的効果を了解せしめ進んで之に従事し且修身科等に於て修得したることを直に實行に移すと共に又本科に於て剛致せられたる規律節制協同團結の氣風習慣を校外一般の場合に勵行せしむ。

### 二、教授の重點

體操教練は密接に聯繫を保持し生徒心身の發達に鑑み共に各々適切なる教材進度の配當に留意し以て體育の振興健全なる精神の陶冶に努む。

### 體操

低學年に於ては基本的運動を多くし時に身體各部の均齊發育を助長し且つ團體的遊戲に依り快活の精神及規律を守り協同を尙ぶの習慣を養ひ高學年に至るに従ひ漸次應用的運動及競技を加へ以て身體を強健にし且其の動作を機敏ならしめ敢爲剛毅堅忍持久の精神を涵養す。

### 教練

低學年に於ては體操と相待つて身體各部の均齊發育に特に力を用ひ且規律を重んじ節制を守り協同を尙び服従の氣風を作興し高學年に至るに従ひ是を基礎とし更に身體を強壯にし堅忍敢爲の精神を涵養し自主自立の習慣を剛致するに努む、特に指揮官、助教助手の勤務を服行せしめ人に長たるの修養を體得せしむると共に責任感念を旺盛ならしむ。各種記念日等には努めて全校生徒の合同教練を行ひ團體的訓練に資し以て益々國家的觀念を明徴にし獻身奉公の精神を振起す。

當校生徒の地方的特質に鑑み剛健なる氣風堅忍持久の身心鍛練の爲夏季炎熱時冬季寒冷時に於ける屋外教練及行軍野外教練、夜間行動を努めて多く實施す。



## 武道科

### 一、教授の方針

我が國傳統の武道は國民の身體的特長、國民性風習等により自然に攻撃防禦の方法として成立せしものなり。而して武道は攻撃防禦の技術修行間に身體は鍛練され精神は修養さる。其の蘊奥を極むれば心身自在、精力善用の境地に達し得る故に武道の修行は鍛練修養せられたる心身の力を醇化し心身共に健全なる人を養成するを目的とす。そが體育のみならず智育德育に關係を有す。

### 二、教授の重點

學校武道は技術以上、體育以上の精神訓練特に氣魄ある武道精神の涵養にあり。

### 三、其 他

- (1) 武道は深遠なる道なり。短日月の間に修得し得ざるも道場内の教育は嚴肅にして氣力の充實をはかるにあり。
- (2) 武道に於て教授すべきものを大別すれば基本練習亂取(地稽古)試合、型及び精神訓話とす。初年級にては團體的に基本練習を修得せしめ學年の進むに従ひて個人教授をなし鍛練に重きをおき、其の間試合、型、精神訓話を行ふ。
- (3) 身體薄弱者には自己の身體を考察せしめ、體性の許す限り漸次に練習せしむ。
- (4) 寒暑稽古選手及び部員の課外練習に於ては過勞のため學科に支障を生ぜざる様注意す。

## 作業科

### 一、教授の方針

- 1 現代に於ける文化的使命を遂行する即ち經驗的殊に體験的知力により現代文化を傳達擴充し自然を創造し進んで環境をも自己に順應せしむる健全有能なる人格を作らしむ。
- 2 生徒各自の自發活動を尊重し勤務、協同、自治の精神を涵養すると共に經驗し反復する事により、強き心力の啓培に努む。

### 二、教授の重點

- 1 學校に於て學習せる作業を生活化する。
  - 2 簡單なる物品を製作する事によりて日常生活に有用なる知能を與へ以て綿密且つ獨創工夫の習慣及び勤勞愛好の精神を養ふ。
  - 3 日常生活に必要な動植物の飼育栽培の方法及び是が利用厚生の道を明にすると同時に身體を鍛練し以て潤達なる青年の氣風を養ふ。
  - 4 同輩者に共通の生活、共働の仕事の爲に妥協し協調するの心量を助長し以て社會人としての價值を發揮せしむる事に努む。
  - 5 生徒に自由を與へ責任感を助長せしむる爲に自ら作業を計劃し自ら實現するの方途に出でしむ。
  - 6 作業後の衛生を徹底せしむ。
- 三、其 他
- 1 教材は出來得る範圍に於て各科に關係あるものを選ぶ。

- 2 工作室、圃場の清潔整頓をよくし作業を合理化す。
- 3 校地校舎の修繕を自發的に行はしむ。

## 農 業 科

### 一、教授の方針

實習作業を本體とし農業に關する一般的知識技能を授け實驗的實習的經濟的に農業を經營し、實際生活を理解せしめ農業に對する趣味を養成し勤勞愛好の精神涵養に努むると共に郷土に對する敬虔の念を喚起し農業改發の工夫を爲さんしめ以て品性の陶冶、人格の完成を圖らんとす。

### 二、教授の重點

- 1、郷土を研究し農業の價值を知らしむ。
- 2、各科互に相聯絡して補益す。
- 3、實習の方法豫定は生徒の研究的態度より發したる要求を本として作成す。
- 4、常に實習日誌を記入し觀察眼の養成を謀り注意力を喚起せしむ。
- 5、五年生個人分擔地には小作制度を加味し小作農、農業勞働を理解せしむ。
- 6、晴耕雨讀の眞味を解せしむ。

## 商 業 科

### 一、教授の方針

商業に關する知識を授け、實際生活を理解せしめ職業尊重の所以を明にし、更に創造工夫の力、計畫立案の才幹並實行力を養ひ、進取的氣象の育成に努め、商業各般に亘つて工夫を凝らし創造に努むるを目的とす。

### 二、教授の重點

#### 1、教科書に依る方法

イ、之に依つて商業の概念即ち賣買、交通、倉庫、金融、取引所等に關する一般的知識を授く。

ロ、教科書は簡明にして冗長ならざるものを使用す、教科書を使用するも之を萬能とせず、書中に示されたる事項と關聯したる時事問題に付き屢々比較對照せしむ。

#### 2、實踐學科（主として珠算、簿記）に依る方法。

イ、珠算の基本的練習としては（一）暗算（讀上、見取）、（二）加法及減法（讀上、見取）、（三）乘法及除法の三方法に依る、更に學習者に興味を興へ、向上を圖る爲めに應用的練習を課す、應用的練習は（一）加法及加減縱橫算（二）收支算、（三）貸借算、（四）合計殘高算（五）傳票記入算に分類す。

ロ、簿記に付ては單複兩式簿記の原理法則を會得せしめ、之により應用方面（記帳、計算）の近世に於ける改良進歩せる點を學習せしむ。

## 音 樂 科

### 一、教授の方針



施行規則に明示せるが如く、歌曲を唱ふる事を得しめ、美感を養ひ、心情を高潔にし、兼ねて徳性の涵養に資するを以て目的とす。

## 二、教授の重點

### 1 教授の出発點

生徒が小學校にて養成せられたる唱謠力及び鑑賞力を基礎として、新入學生に對して先づ校歌を授け、其れと同時に、基本練習を始む。

### 2 基本練習

毎時若干の時間を割きて之をなし、樂理的根據によりて定見ある系列の下に繼續的に練習せしむ。發聲練習は呼吸練習と相俟つて之を行ひ特に母音の發聲は繰返し練習して優美正確の域に到らしむ。音程は聴取する事と、唱謠する事との兩方面より練習し、重音を聴取し得るやう導くものとす。

### 3 歌曲

歌曲の選擇は藝術的見地に依り、高尚優雅にして、生徒の審美的情操を啓培し、道徳的情操の涵養に資するものたるべきは勿論なれども、同時に又心理的根據を省み、生徒現在の唱謠力に鑑賞力の程度に應ずる事を標準とす。又特に代表的名曲のレコードを集め蓄音機により鑑賞力を養ふものとす。而して歌曲は徒らに其の數の多きを求めず、精選せるものを反覆練習して熟達せしめん事を期す。

## 三、他

### 1 音樂理論

樂曲の教授には特別の時間を設くる事なく、歌曲を授くる際若干の時間を割きて之が教授に當て、音の名稱、譜表、音符、休止符、調子、拍子、速度、發想記號等に亘りて、近易なる事項を授く。

### 2 變聲期の生徒

變聲期の生徒にして、他の生徒と齊唱せしめ得ざるものは、其れ等を一團として、適當に移調して歌はしむ。

## 現在職員及各種調査表

現在職員

職名	受持學科	姓名	就職年月	出身府縣
校長(奏)	修身	森田勝平	昭和四年七月	靜岡縣
教諭(奏)	數身	晴山酉松	大正九年五月	岩手縣
教諭(奏)	修身、國語、漢文	竹內正幹	大正十三年五月	廣島縣
教諭(奏)	英語、化學	石原省三	大正十三年二月	兵庫縣
教諭	物理、歷史	川合久	大正十四年四月	岡山縣
教諭	地理、英語	宮山隆三	大正十一年四月	群馬縣
教諭	英語、學語	池田廣治	大正十一年三月	大府縣
教諭	理科、商業	志賀元八	大正十四年四月	秋田縣
教諭	英語、商業	廣安文一	昭和七年三月	廣島縣
教諭	修身、柔道	望月湛然	大正十二年三月	兵庫縣
教諭	國語、漢文	長谷川元太郎	大正十三年四月	青森縣
教諭	國語、漢文	井上庄三郎	昭和六年四月	富山縣
教諭	國語、漢文	神谷義仙	昭和四年九月	愛知縣
教諭	國語、漢文	井上茂治	大正十四年三月	兵庫縣
教諭	國語、漢文	宮崎吉脩	昭和三年五月	三重縣

職名	受持學科	姓名	就職年月	出身府縣
教諭	英語、公民	藤倉寬三	昭和四年十一月	高知縣
教諭	物理、數學	楊井啓治郎	昭和五年五月	大府府
教諭	歷史	植杉英之助	昭和五年三月	兵庫縣
教諭	修身、國語、漢文	能登眠牛	昭和二年三月	兵庫縣
教諭	博物、作業	武岡又吉	昭和二年十月	兵庫縣
教諭	英語	森本巖	昭和四年九月	兵庫縣
教諭	劍道	杉山義親	大正十四年十月	埼玉縣
教諭	圖書、習字	西村義人	昭和六年四月	熊本縣
教諭	體操	繁益重信	昭和七年三月	兵庫縣
教諭	農業、作業	太田垣貞保	昭和六年六月	兵庫縣
兼任教諭	音樂	金健二	昭和五年三月	青森縣
書記	會計	赤松茂一郎	大正六年十二月	兵庫縣
書記	庶務	津島克巳	昭和五年八月	岡山縣
配屬將校	練習	安達清作	昭和六年三月	秋田縣
學醫	練習	弓場秀三	昭和五年三月	兵庫縣

### 校地及建物

校地總坪數	五、八五〇坪	時價	八七、七五〇圓	運動場坪數	二、二九四坪
內建坪總數	一、〇六二坪	購入	九九、六五五圓	其他	二、四九四坪

### 昭和七年度經費歲出豫算額調

科目	豫算金額	科目	豫算金額	校費		豫算金額
				校費	豫算金額	
校長費	二、五二五	備品費	一、四四八	被服費	四一	豫算金額
俸給	三五、二二六	消耗品費	七二六	實習費	一〇〇	
雜給	二、五七二	圖書及印刷費	四三三	雜費	一三一	
國庫納金	三四四	通信運搬費	一五二	計		
校費	三、一九六	賄賂費	一六五			
計						三、一九六

### 備品及圖書調

#### 備品ノ部

種類	員數	購入價格	種類	員數	購入價格
器械具	二、七三〇	一二、五〇八圓	教練用具	一、七九五	一、八一八圓
理科機械	二、九四〇	七、〇〇三	農業用具	一八三	二五三
博物標本	一、四八〇	二、二三一	計		
地理、數習、圖書	一、〇〇二	三、四二八		一〇、一三〇	二七、二四一

#### 圖書ノ部

種類	冊數	購入價格	種類	冊數	購入價格
法規法令	九六	四九圓	地理	二五八	六六〇
法經濟	四六	五七	圖書	三六〇	六三五
歷史	一、〇三五	一二、二七	體操	七二	八四
雜書	七三	一五三	國語	六四五	九七四
數學	一四五	四四四	英語	三五六	一、〇六〇
博物學	三七九	六〇四	教語	六	二五
物理學	一三五	四五三	計		
修理化身	二四八	四六三		三、八五四	六、八八八

家長職業別

職業	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	第五學年	計
農	二五	三二	三五	五二	三四	一七八
商	三〇	二四	二六	六八	一七	一〇五
工業	七	六	九	八	二	三〇
社會	三八	三一	四	二四	〇	二七
教會	五	一八	四	八	六	三三
官吏	一八	一	五	四	六	三三
醫師	五	八	四	八	六	三三
宗教	三	九	二	八	七	二四
新開	七	八	八	四	六	三三
請負	四	四	一	七	四	二二
其他	一	一	一	一	一	五
計	一六一	一五〇	一二四	一三〇	一一五	六八〇

生徒學級別

(昭和七年四月現在)

學年	學級數	1組	2組	3組	計	內休學數
第一學年	三	五	五	五	一六	〇
第二學年	三	四	四	四	一五	〇
第三學年	三	四	四	四	一五	〇
第四學年	三	四	四	四	一五	〇
第五學年	一	三	三	三	一〇	〇
計	一五	二二	二二	二二	六七	三

生徒原籍及住所郡市別調

(昭和七年四月現在)

學年	原籍		計	神戶市	西宮市	尼崎市	大阪市	川邊郡	武庫郡	有馬郡	豐能郡	其他	計
	本縣內	他府縣											
第一學年	七八	八三	一六一	一四	五	一	三〇	六九	二五	二	二	三	一六一
第二學年	八四	六六	一五〇	五	六	一	二七	八二	一七	一	一	〇	一五〇
第三學年	八三	四一	一二四	七	二	一	二六	八六	一六	一	一	〇	一二四
第四學年	九〇	四〇	一三〇	五	三	一	三三	九五	一四	一	一	〇	一三〇
第五學年	七〇	四四	一一四	五	二	一	三三	七二	二七	一	一	〇	一一四
計	四〇五	二七四	六七九	三六	一八	五	六九	四〇四	九九	一二	三〇	六	六七九

### 生徒缺席状況 (昭和六年度)

月	種別		出席日数	在籍人員	缺席總數	出席百分比	缺席百分比
	出席	欠席					
四月	二〇	六五三	二〇	六五三	二二三	九八・二九	一・七一
五月	二六	六五二	二六	六五二	三二二	九八・一〇	一・九〇
六月	二六	六五二	二六	六五二	三四九	九七・九四	二・〇六
七月	一七	六五二	一七	六五二	二二二	九八・〇九	一・九一
八月	二五	六四九	二五	六四九	三九三	九七・五八	二・四二
九月	二一	六四七	二一	六四七	三五〇	九八・五一	一・四九
十月	二一	六四六	二一	六四六	三六七	九七・六三	二・三七
十一月	二一	六四四	二一	六四四	二六一	九八・〇六	一・九四
十二月	二五	六四五	二五	六四五	四四二	九六・六二	三・二八
計	一〇	五三三	一〇	五三三	一七二	九六・七六	三・二四

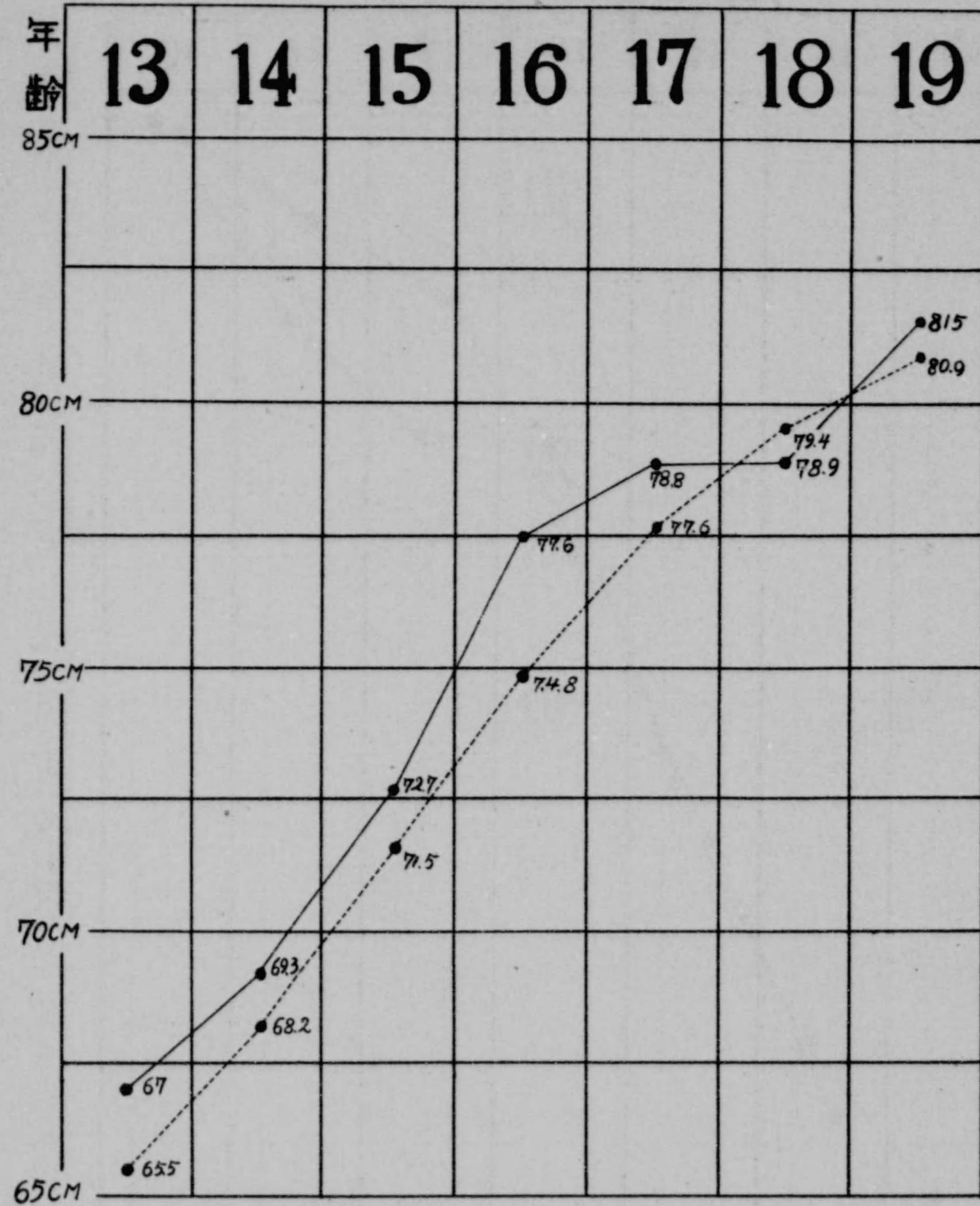
### 最近五ヶ年間ニ於ケル優等者皆勤者調

年	種別	昭和二年度					昭和三年度					昭和四年度					昭和五年度					昭和六年度				
		優等	皆勤	皆勤	皆勤	皆勤	優等	皆勤	皆勤	皆勤	皆勤	優等	皆勤	皆勤	皆勤	皆勤	優等	皆勤	皆勤	皆勤	皆勤	優等	皆勤	皆勤	皆勤	皆勤
五	皆勤	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
四	皆勤	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
三	皆勤	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
二	皆勤	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
一	皆勤	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
計	皆勤	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二

### 生徒通學狀況及居所調 (昭和七年四月現在)

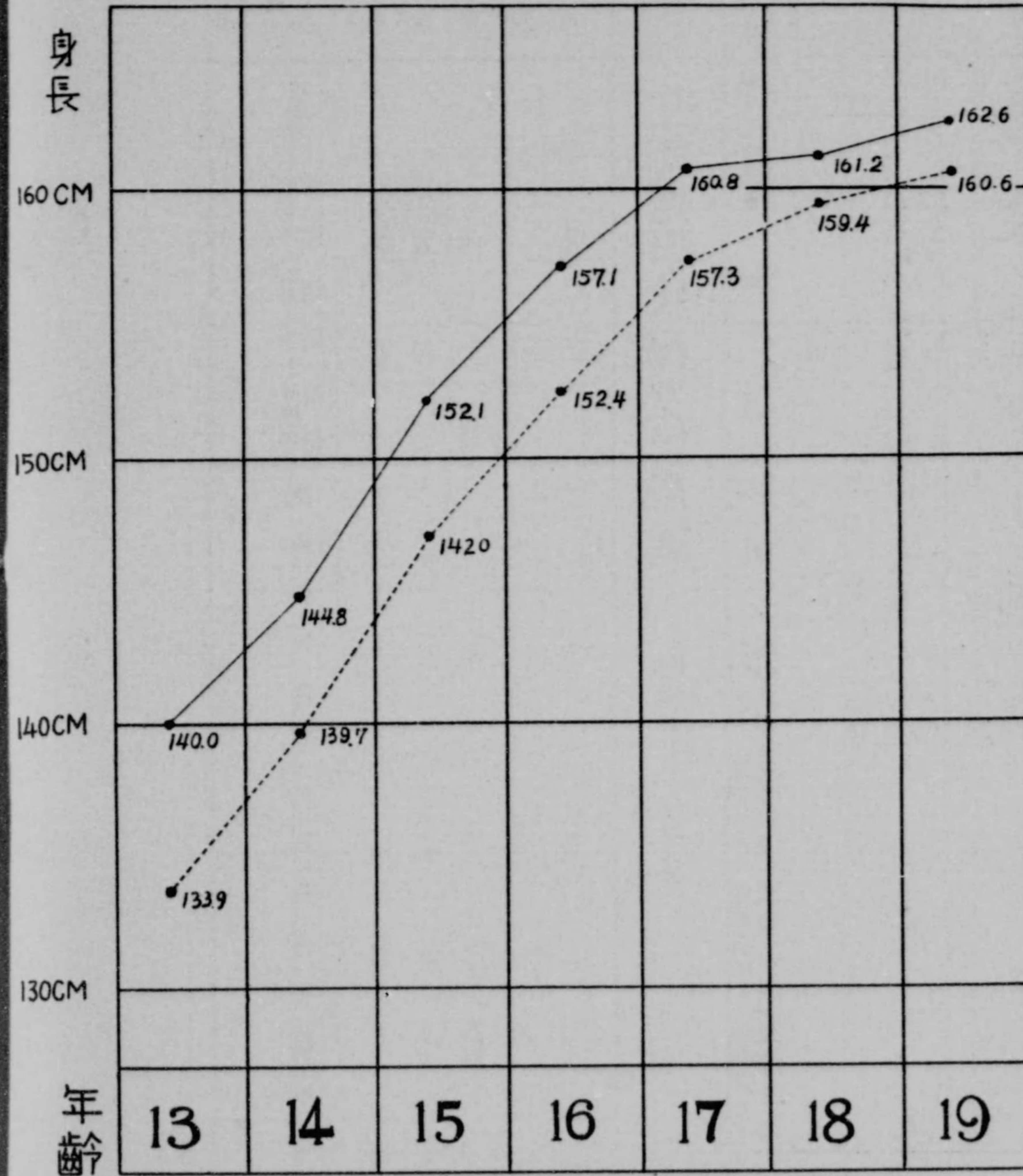
學年	通學ノ者					自宅ヨリ					親戚ヨリ					縁故者ヨリ					修學寮ヨリ					
	計	徒歩	自轉車	電車	汽車	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計
第一學年	三二	三二	一五	七四	四〇	一六一	一五八	一四四	一四四	一四四	一四四	一四四	一四四	一四四	一四四	一四四	一四四	一四四	一四四	一四四	一四四	一四四	一四四	一四四	一四四	一四四
第二學年	三九	三九	二六	六〇	三九	一五〇	一四九	一四九	一四九	一四九	一四九	一四九	一四九	一四九	一四九	一四九	一四九	一四九	一四九	一四九	一四九	一四九	一四九	一四九	一四九	一四九
第三學年	三六	三六	二七	五七	三六	一四七	一四七	一四七	一四七	一四七	一四七	一四七	一四七	一四七	一四七	一四七	一四七	一四七	一四七	一四七	一四七	一四七	一四七	一四七	一四七	一四七
第四學年	四九	四九	二七	四七	四九	一四七	一四七	一四七	一四七	一四七	一四七	一四七	一四七	一四七	一四七	一四七	一四七	一四七	一四七	一四七	一四七	一四七	一四七	一四七	一四七	一四七
第五學年	四三	四三	二七	四七	四三	一四七	一四七	一四七	一四七	一四七	一四七	一四七	一四七	一四七	一四七	一四七	一四七	一四七	一四七	一四七	一四七	一四七	一四七	一四七	一四七	一四七
計	一九九	一九九	一四一	二七九	一六九	一六九	一六九	一六九	一六九	一六九	一六九	一六九	一六九	一六九	一六九	一六九	一六九	一六九	一六九	一六九	一六九	一六九	一六九	一六九	一六九	一六九

# 胸圍



.....ハ全國學生々徒ヲ示ス  
 ——ハ本校生徒ヲ示ス

# 身長表

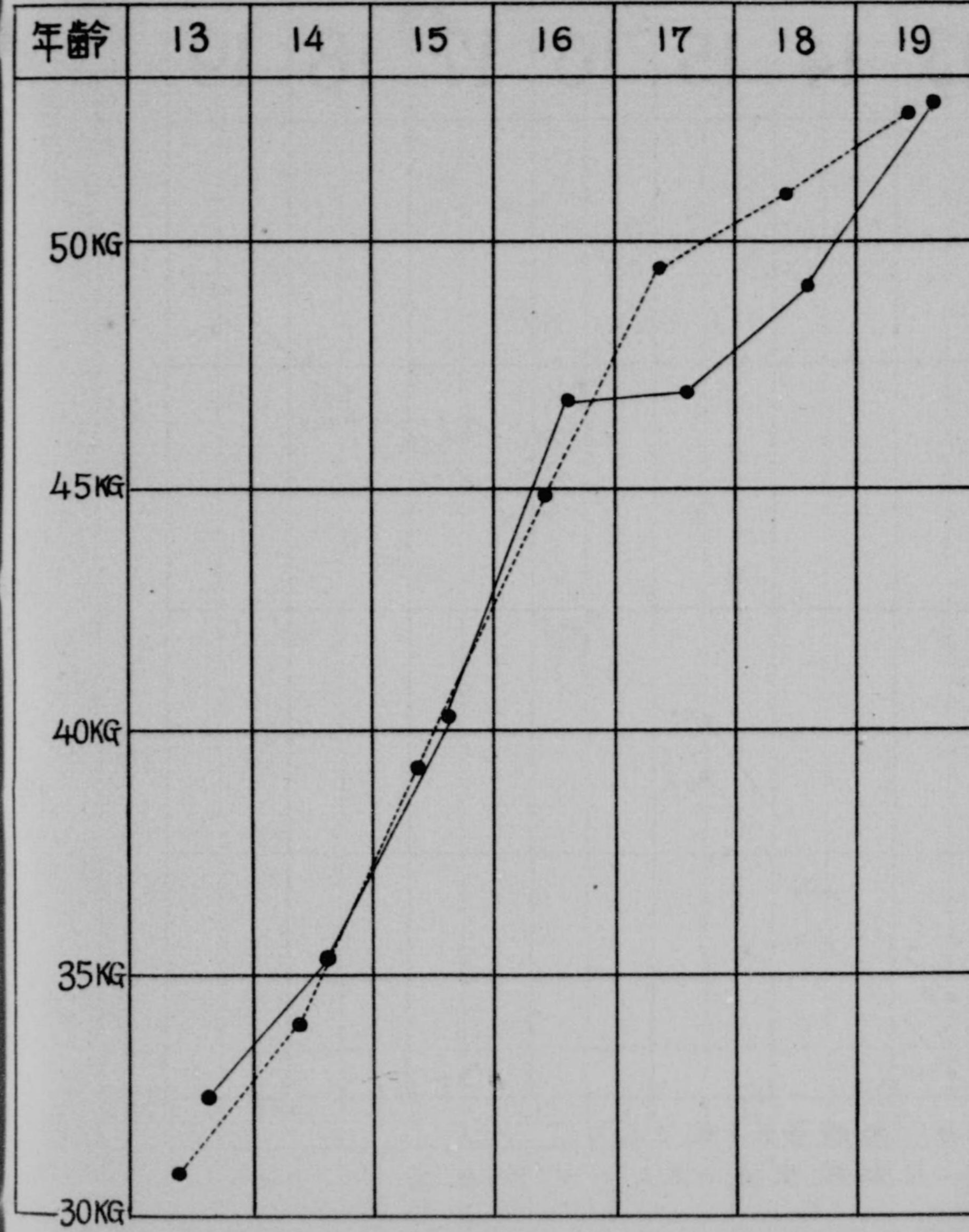


.....ハ全國學生ヲ示ス  
 ——ハ本校學生ヲ示ス

全國學生ト本校生徒トノ体格比較表

戊辰會

體重



戊辰會 (保護者會)

昭和三年二月二十六日御大禮記念事業の一として阿部校長の絶大なる御努力によつて創設せらる。

會則

- 第一條 本會ハ兵庫縣立伊丹中學校戊辰會ト稱シ事務所ヲ同校内ニ置ク
- 第二條 本會ハ學校ト家庭トノ連絡ヲ密接ニシ其ノ教育事業ヲ援助スルヲ目的トス
- 第三條 本會々員ハ在學生徒ノ保護者及ビ本校職員ヲ以テ組織ス
- 第四條 本會ノ經費ハ會費及ビ有志者ノ寄附金ヲ以テ充ツ會員ハ本校職員ヲ除キ會費トシテ一人毎月金五拾錢ヲ毎月五日マデニ納付スルモノトス 但シ八月ヲ除ク
- 第五條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク
  - 一、會長 一名 學校長之ニ當ル
  - 但シ會長差支アルトキハ理事之ヲ代理ス
  - 二、理事 三名 職員中ヨリ會長之ヲ囑託シ評議員ヲ兼ヌ

- 三、評議員 各學年 三名 二名ハ生徒ノ保護者中ヨリ之ヲ互選ス
- 但シ第一學年ニ限り會長之ヲ囑託ス一名ハ學年主任ヨリ會長之ヲ囑託ス
- 四、書記 二名 職員中ヨリ會長之ヲ囑託ス
- 第六條 役員ノ任務左ノ如シ
  - 一、會長ハ會務ヲ總理ス
  - 二、理事ハ會務ヲ處理ス
  - 三、評議員ハ豫算決算及ビ重要ナル會務ヲ審議ス
 但シ豫算審議ハ各年度末ニ於テ次年度ノ豫算ヲ審議スルモノトス
- 四、書記ハ庶務及ビ會計事務ヲ取扱フ
- 第七條 理事、評議員及ビ書記ノ任期ハ一ケ年間トス 但シ再選スルコトヲ得
- 第八條 本會ノ目的ヲ達センガ爲左ノ事業ヲ行フ
  - 一、學校及ビ家庭連絡ニ關スル事項
  - 二、教育上必要ナル備品圖書ノ提供及ビ諸設備ノ援助
  - 三、生徒ノ課外指導
  - 四、職員ノ學術研究援助
  - 五、其ノ他適當ト認ムル事項

昭和五年度戊辰會收入支出決算書

◎ 收入之部

科目	豫算	決算	増減	備考
會費	三、三〇〇、〇〇〇	三、一六〇、〇〇〇	減	豫算額年一名五、五〇〇六百名減一一四圓ハ兄弟二名ノ通學者數多キタメト轉退學者ノ多キ結果ナリ
預金利子	三〇、〇〇〇	三五、八〇〇	増	
前年度繰越金	六八二、五〇〇	六八二、五〇〇	—	
雑收入	一、〇〇〇	—	減	
合計	四、〇〇二、五〇〇	三、九〇八、三〇〇	減	
			減	一〇九、二〇〇

第九條 毎年一回春季ニ於テ總會ヲ開キ會務會計報告及ビ役員ノ改選ヲ行フ

第十條 毎年一回以上評議員會ヲ開キ會務ヲ協議ス

評議員會ハ評議員總數ノ過半数ノ出席ヲ以ツテ成立ス

第十一條 議決ハ出席者ノ過半数ヲ以テ採決シ賛否同數ノ場合ハ會長之ヲ決ス

第十二條 本會ノ會計年度ハ毎年四月ニ始マリ翌年三月ニ終ルモノトス

第十三條 本會ノ規則ヲ改正セントスル時ハ評議員會ニ於テ決議シ總會ノ承認ヲ經ルヲ要ス

第十四條 本會則ヲ施行スル爲ニ細則ヲ設クル必要アルトキハ評議員會ニ附議シテ之ヲ決ス

以上



昭和六年度豫算調書

◎收入之部		◎支出之部	
科目	六年度豫算額	五年度豫算額	比較増減
會費	三,三〇〇,〇〇〇	三,三〇〇,〇〇〇	—
預金利息	三〇,〇〇〇	三〇,〇〇〇	—
前年度繰越金	〇,七〇〇	六八,五〇〇	六八,七〇〇
雜收入	一,〇〇〇	一,〇〇〇	—
合計	三,三三〇,七〇〇	三,三三〇,〇〇〇	七〇〇
備			會費年額五、五〇錢ノ六百名分
考			
◎支出之部		◎支出之部	
科目	六年度豫算	五年度豫算	比較増減
諸會合費	一三〇,〇〇〇	七〇,〇〇〇	六〇,〇〇〇
會報發刊費	一〇〇,〇〇〇	五〇,〇〇〇	五〇,〇〇〇
備品圖書費	一四〇,〇〇〇	一,七〇〇,〇〇〇	七五〇,〇〇〇
課外指導費	六五〇,〇〇〇	七〇〇,〇〇〇	五〇,〇〇〇
職員講習及視察出張費	四〇〇,〇〇〇	四〇〇,〇〇〇	—
講出費	一〇〇,〇〇〇	六〇,〇〇〇	四〇,〇〇〇
備			(備品圖書)國旗竿一基、擴聲器一個、黑漆講堂用、檢微鏡五臺、算盤五五、衛生戸棚一個、體重秤一個、戶外、椅子五、教室用レコード、溫室日除、喇叭鼓隊補助、輪轉機補助、雨傘、圖書、其他備品
考			

◎支出之部		◎支出之部	
科目	豫算額	決算額	増減
諸會合費	七〇,〇〇〇	一四六,〇〇〇	八〇,〇〇〇
會報發刊費	五〇,〇〇〇	一〇九,五〇〇	五九,五〇〇
備品圖書費	一,七〇〇,〇〇〇	一,八〇三,八〇〇	三三,八〇〇
課外指導費	七〇〇,〇〇〇	六四一,〇〇〇	五九,〇〇〇
職員講習視察出張費	四〇〇,〇〇〇	三七〇,七〇〇	二九,三〇〇
講出費	六〇,〇〇〇	一〇三,九〇〇	四三,九〇〇
獎學費	三〇,〇〇〇	三五,二〇〇	五,二〇〇
事務費	三〇,〇〇〇	二八,五〇〇	一,五〇〇
手當費	一三〇,〇〇〇	一三〇,〇〇〇	—
雜費	四〇,〇〇〇	四七,二〇〇	七,二〇〇
積立金	三〇〇,〇〇〇	三〇〇,〇〇〇	—
記念品資金	一〇〇,〇〇〇	一九〇,〇〇〇	九〇,〇〇〇
豫備費	三三,五〇〇	—	—
合計	四,〇一三,五〇〇	三,九三三,五〇〇	一〇九,九五〇
本年収入總額	參千九百四圓參拾貳錢	同支出總額	參千九百參圓五拾五錢
差引殘額	七拾七錢(六年度へ繰越)		
備			金八四圓六一錢豫備費ヨリ支出 金五九圓五〇錢豫備費ヨリ支出 金一二圓八〇錢豫備費ヨリ支出 金五九圓記念品資金へ流用減 金二九圓三〇錢記念品資金へ流用 金四三圓九五錢豫備費ヨリ支出 金五圓二〇錢豫備費ヨリ支出 金一圓四二錢記念品資金へ流用 金七圓二一錢豫備費ヨリ支出
考			金五九圓課外指導費ヨリ、金二九圓三〇錢出張費ヨリ 金一圓四二錢事務費ヨリ流用増金二八錢豫備費支出 八四圓六一錢會合費、五九圓五〇錢會報費、一二圓八〇錢備品費、四三圓九五錢講出費、五圓二〇錢獎學費 七圓二一錢雜費へ二八錢記念品資金へ支出、二〇九、九五〇計二百一三圓五五錢支出、差引殘一〇九、九五〇



實施表

(十一月十四日土曜日)

時間	實施事項	教授者其他ノ係	生徒	要項其他
自七、五二	朝禮、國旗掲揚	安達、鶴野	全校生徒	運動場(喇叭鼓隊)
自八、八〇 至八、四〇	第一限			
自九、八五 至九、四五	第二限			
自一〇、三五 至一〇、五〇	第三限			
自一〇、四五	合同體操	鶴野	全校生徒	運動場(喇叭鼓隊)
自一一、〇〇	校友會各部 劍道部、柔道部、野球部、庭球部、角力部、文藝部、各部	杉山、井上(庄)、川合、志賀、青木、竹内、石原	各學年ヨリ計三八 同 二六 同 一二 同 一二 同 二八 委員一〇、四、五 年有志一〇、二二	同 同 同 同 同 選手及選手候補者

時間	實施事項	教授者其他ノ係	生徒	要項其他
自一一、四五 至一一、四五	活動ノ 長距離競走、辯論部、喇叭鼓隊	森本、鶴野、神谷、武岡	一、二、三年全部 殘員全部 各學年ヨリ 一八	但シ選手及選手候補者ヲ除ク 講堂 運動場
自一〇、二五 至一〇、四五	畫食陳列菊花縱覽	赤松、杉山、袴田、太田垣		食堂、講堂
自〇、二五	教室ニ於ケル作法	一年 青木、宮山、池田 二年 袴田、宮崎、森本 三年 石原、井上、武岡 四年 竹内、志賀、藤倉 五年 川合、望月、神谷		各教室
自〇、四五	分團訓練	伊丹、稻野、園田、立花、小田、神津、豐能、川西、長尾、小濱、多田、武庫、其元、大社、瓦木、西宮、今津、精道、御影、神戸、塩瀬、大阪	全校生徒	運動場 校歌合唱
自〇、四五	校旗出場、整列檢査、分列式、國旗降納、校旗退場	安達、長谷川、鶴野		運動場(喇叭鼓隊)

櫻 窓 會

至 四、三〇	自 二、二〇	自 一、二五
學年主任トノ懇談	治療衛生 給品部 會長 挨拶	農 業 科 作 業 科 園 藝 科 各 普 通 教 室 銃 器 室 物 化 室 博 物 室 文 物 室 各 部 室
	長谷川 能登	太田垣 武岡 務田 山崎 石原 1宮山 2宮崎 3石原 4鶴野 5望月 安達 楊井 西村 植杉 各部長
	四年委員 一〇名 二名	五四年各當番 一四一年三組全部 七六九四三全部 各組 四年生 一〇名 三年生 二〇名 二年生 一五名 二年生 一五名 委員六員四計一〇名
	衛生室 會議室 一同講堂ニ着席、撮影	農 場 作 業 場 園 藝 場 銃器手入 一、二年ニハ五年生六名宛 配屬ス

## 櫻窓會 (同窓會)

櫻ヶ崎の同じ學舎に學べる友が年を経て共に語り舊情を温めたきは情の自然理の當然にして、早くも明治四十三年八月七日同窓會設立の議起り發起人より左記會則原案を提出し決議せられたり。

### 兵庫縣立伊丹中學校同窓會假規則

- 第一條 本會ハ之ヲ兵庫縣立伊丹中學校同窓會トス
  - 第二條 本會本部ヲ兵庫縣立伊丹中學校々内ニ置ク
  - 第三條 本會ハ主トシテ伊丹中學校卒業生ト在校生トノ相互間ノ親睦ヲ計リ母校ニ對スル敬愛ノ念ヲ永久ニ保持スルヲ以テ目的トス
  - 第四條 本會々員ハ之ヲ正會員、贊同會員、及ビ名譽會員トシ、正會員ハ卒業生、贊同會員ハ職員ヲ以テ組織シ名譽會員ハ本會ノ推薦ニ依ルモノトス
  - 第五條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク
- 會長 一名 現任校長  
副會長 一名 主席教諭

幹事長 一名 文藝部主任  
幹事 若干名

- 會長ハ現任校長トシ本會ノ事務ヲ統ブ  
副會長及ビ幹事長ハ現任職員中ヨリ之ヲ任ジ會長ヲ輔佐スルモノトス  
幹事ハ正會員中ヨリ選舉ニ依リテ之ヲ定メ本會ノ事務ヲ掌リ任期一ケ年トス
- 第六條 本會ハ毎年七月上旬ニ本部大會ヲ開催シ大會ニ關スル詳細ノ事項ハ隨時之ヲ定ム
  - 第七條 本會員ハ各地ニ散在スルヲ以テ會員五名以上ヲ有スル土地ニテハ隨時本會支部ヲ開催スルコトヲ得
  - 第八條 各支部ニ關スル詳細ノ規定ニツキテハ本會ノ目的ト相反セザル限り各支部ノ自由ニ一任ス
  - 第九條 本會支部ヲ開催スル時ハ必ズコノ旨本部ニ通知スルモノトス
  - 第十條 本會記事ハ校友會々報ノ一部ヲ以テ之ニ充ツ
  - 第十一條 本會ノ維持經營ヲ計ルタメ左ノ會費ヲ徵集ス  
正會員ヨリ會費トシテ年拾錢ヲ、入會費トシテ五拾錢ヲ納付セシム

以上

大正五年七月拾六日に於ける卒業生懇親會にて左記諸件の決議あり。

### 決議要項

- 一、同窓會ノ鞏固ナル基礎ヲ築キ其發展ヲ計ルタメ會員ハ毎年金參拾錢宛納入ノコト
  - 一、新ニ卒業スル者ハ其ノ卒業前ニ納入ノコト
  - 一、遠隔ノ地ニアル者ハ振替貯金ニテ納入ノコト
  - 一、毎年一回七月下旬母校ニ於テ同窓會開催ノコト
- 以上

大正八年八月二日神戸に於ける伊丹會にて左の同窓會改制要求あり

- 一、校友會ト分離
  - 二、會費値上
  - 三、基本金募集
  - 四、一定條件ヲ附シテ各地ニ支部公認
  - 五、獨立の會報ノ發行
- 卒業生と母校とは校友會がその事業の一ミして毎年七月

を期して開催せる親睦會によつて一縷の連絡を保てるに過ぎず、尙一部の同期生間に於て會合が催され或は追悼會等も行はれたるも縦に横に打つて一丸としたる組織的同窓會の設立は計畫のみに終つて確立を見るに至らざりき。

### 櫻窓會創立

偶々昭和三年七月十五日に於ける親睦會に於て同窓會設立促進の希望が滿場一致を以て表示せられたるに端を發し役員一同の熱誠によつて十月二十八日設立總會を開催し櫻窓會の名を以て同窓會が組織せられ茲に曠古の御大禮を永遠に記念するに至れり。

### 會 則 (昭和三年十月二十八日成立)

- 第一條 本會ハ兵庫縣立伊丹中學校櫻窓會ト稱シ本部ヲ同校内ニ置ク
- 但會員多數在住ノ地ニ支部ヲ設クルコトヲ得
- 第二條 本會ハ會員相互ノ交誼ヲ温メ修養ニ資スルト共ニ母校ト連絡ヲ密ニシ其ノ教育事業ヲ援助スルヲ以テ目的

トス

第三條 本會ハ左ノ會員ヲ以テ組織ス

一、通常會員 イ、母校卒業生

ロ、第四學年ヲ修了シ上級學校ニ入學シタルモノ

ハ、其ノ他母校ニ在學シタル者ニシテ入會ヲ希望スル者

二、特別會員 母校現在職員、舊職員、母校ニ對シ功勞アリ總會ニ於テ推薦シタル者

第四條 本會ノ經費ハ會費及ビ有志者ノ寄附金ヲ以テ之ニ充ツ

第五條 會員ハ特別會員ヲ除キ會費トシテ毎年金壹圓ヲ四月中ニ納付スルモノトス

但二個年分以上ヲ一時ニ納付スルモ妨ナシ

又終身會費トシテ金拾圓ヲ一時ニ完納スルコトヲ得

第六條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク

一、會長 一名 母校現在校長ヲ推戴ス

二、副會長 一名 母校現在首席教諭ヲ推戴ス

三、理事 若干名 母校現在職員及ビ通常會員中ヨリ會長之ヲ推舉ス

四、評議員 若干名 母校現在職員及ビ通常會員中ヨリ會長之ヲ推舉ス

第七條 役員ノ任務左ノ如シ

一、會長ハ會務ヲ總理ス

二、副會長ハ會長ヲ補佐シ時宜ニヨリ會長代理ヲナス

三、理事ハ庶務及ビ會計事務ヲ分掌シ一切ノ會務ヲ處理ス

四、評議員ハ重要ナル會務ヲ審議ス

第八條 理事及ビ評議員ノ任期ハ二個年トス

第九條 本會ノ目的ヲ達センガ爲メ左ノ事業ヲ行フ

一、會員名簿及ビ會報ノ發刊

二、慶弔慰安

三、新入會員歡迎會親睦會其ノ他有益ナル會合

四、右ノ外適當ト認ムル事項

第十條 會員ハ轉居、學校卒業、就職、其ノ他身上ノ移動ヲ本會ニ通知スベキモノトス

第十一條 毎年一回夏季ニ於テ總會ヲ開キ會務會計報告ヲナス

但シ評議員會ニ於テ必要ト認ムル時ハ臨時總會ヲ開クコトアルベシ

第十二條 毎年一回以上評議員會ヲ開キ會務ヲ協議ス評議員會ハ評議員總數ノ三分ノ一以上ノ出席ヲ以テ成立シ其ノ議案ハ出席者ノ過半數ヲ以テ之ヲ決ス

第十三條 本會ノ會計年度ハ四月一日ニ始マリ翌年三月三十一日ヲ以テ終ル

第十四條 本會則ヲ施行スル爲メ細則ヲ設クル必要アル時ハ評議員會ニ於テ之ヲ定ム

第十五條 本會則ヲ變更セントスル時ハ總會出席者過半數ノ同意ヲ得ルヲ要ス

以上

中華民國視察談 陸軍少佐 藤田久太郎氏 (第一回卒業)

五、餘興 落語 桂小春團治氏

六、會 食

新入會員 (第二十六回卒業生) 歡迎會狀況 (昭和七年三月二日) 自午後一時五十分 於柔道場

一、開會ノ辭

二、餘 興

イ、琵琶講談 (山田一等兵、鉢の木) 水也田吞洲氏

ロ、時事映畫 (上海事變)

三、閉會ノ辭 (備考 新會員に對しては御祝の菓子箱を贈る)

昭和五年度櫻窓會費決算書

收入ノ部 收入總額

一金五千八拾六圓拾貳錢也 收入總額

血液型に就いて 醫學博士 瀧内 秋治氏 (第七回卒業)

一、會長の挨拶

二、會務會計の報告

三、母校創立三十周年記念事業計劃に關する協議

四、講 演

血液型に就いて

醫學博士 瀧内 秋治氏

(第七回卒業)

昭和三年度櫻窓會總會狀況 (七月二十六日)

内 譯

金參千四百參拾七圓五錢  
 金千四百四拾圓  
 金七拾壹圓  
 金拾六圓  
 金百貳拾貳圓七錢

支 出 ノ 部

一金九百九拾九圓四拾錢也

内 譯

金參百圓  
 金九拾圓四拾九錢  
 金八拾八圓貳拾四錢  
 金百貳拾五圓  
 金貳拾圓六拾錢  
 金百六拾參圓九拾壹錢  
 金百拾八圓拾五錢  
 金八圓  
 金八拾五圓壹錢

一金四千八拾六圓七拾貳錢  
 右ハ昭和六年度へ繰越

前年度繰越金  
 終身會費  
 同上分納金  
 普通會費  
 預金利子  
 支 出 總 額

會報及名簿發刊費  
 會 合 費  
 歡 迎 會 費  
 表 彰 費  
 獎 學 費  
 通 信 費  
 事 務 費  
 旅 費  
 雜 費  
 差 引 殘 高

櫻窓會支出豫算書 (昭和六年度)

科 目	昭和六年度 豫算額	昭和五年度 豫算額
會報及名簿發刊費	三〇〇〇〇	三〇〇〇〇
會 合 費	一〇〇〇〇	五〇〇〇〇
新入會費	九〇〇〇	一〇〇〇〇
歡 迎 會 費	五〇〇〇	一〇〇〇〇
表 彰 費	二五〇〇	一〇〇〇〇
獎 學 費	一七〇〇	一七〇〇
通 信 費	九五〇〇	六五〇〇
事 務 費	一〇〇〇	八〇〇〇
旅 費	四〇〇〇	三〇〇〇
雜 費	三〇〇〇	七五〇〇
豫 備 費	一〇〇〇〇	一〇〇〇〇
計	一・〇〇〇〇〇	一・〇〇〇〇〇

◎母校創立三十周年記念事業

昭和六年七月二十六日 第三回櫻窓會總會に於て母校創立參拾周年記念祝典舉行に際し滿場一致、運動場擴張に賛同鋭意實現を期せり。

決 議 事 項

- 一、募集金額總額壹萬五千圓ヲ、一口五圓トシテ會員全部ニ一口以上ノ寄附ヲ仰グコト
- 二、櫻窓會基金四千圓ノ内參千圓限度ニ祝典並ニ運動場擴張費ノタメ支出スルコト
- 三、寄附金募集ノタメ理事、評議員、一般會員ノ内ヨリ實行委員ヲ依頼スルコト 其ノ選任ハ會長ニ一任スルコト

以上總會の決議に依り實行委員二百三十四名を選び、十月十四日記念事業費寄附募集趣意書並に寄附要項を全會員宛發送す。

實行委員及び會員各位の懸命なる努力ミ母校愛の熱誠とによつて今や旬日の中に實現せんミするに至れるは、母校教育進歩のため慶賀に堪へざる所なり。

編 輯 後 記

- 一、表紙及扉の題字は現校長森田先生の御執筆であります。
- 一、戊辰會櫻窓會兩史は竹内先生、各部沿革史は各部々長其他の諸調査は井上先生が當られました。
- 一、本史の發行は櫻窓會員市川徳次氏が犠牲的奉仕によるまこと多かつたことを感謝します。
- 一、編輯に關しては石原、神谷、井上、能登、太田垣の各先生の手を煩はしました。

昭和七年五月四日印刷  
昭和七年五月八日發行

(非賣品)

編發人兼 三十周年記念 伊丹中學校史  
纂 編 委 員

印刷者 市川德次  
神戸市葦合區北長狹通四丁目一四六

印刷所 市川合名印刷所  
神戸市葦合區北長狹通四丁目一四七



